仙台市文化財調査報告書第90集

若　林　城　跡

― 平安時代の集落跡 ―

1986年 3 月

仙 台 市 教 育 委 員 会

仙台市文化財調査報告書第90集

若　林　城　跡

― 平安時代の集落跡 ―

1986年 3 月

仙 台 市 教 育 委 員 会

序　　文

近年の大きく変質しようとする社会変動の中で、文化財行政に対する市民のニーズは高まりつつあります。

こうした中で、若林地区に所在する若林城跡の発掘調査が実施されました。若林城といえば伊達政宗が晩年に築いた居館として知られている遺構であります。明治12年（1879）宮城集治監として利用され、現在も宮城刑務所として継続利用されている所であります。

本書は、城郭内に工場施設が建設されるための事前調査時の成果をまとめ公開する報文であります。築城以前の平安時代の竪穴住居跡、竪穴遺構、古墳時代の古墳の周湟などが検証され、興味のある歴史事象の発見となりました。

この調査に際しては、宮城県文化財保護課をはじめ、法務省、その他多くの御協力をいただきましたこと、衷心より感謝を申し上げますとともに、今後の文化財保護行政に対し市民の方々の一層の御理解を賜りますことを切望して序といたします。

昭和61年3月

仙台市教育委員会

教育長　藤井　　黎

例　　言

1．本書は宮城刑務所内訓練棟新営工事に先だって行った若林城跡の発掘調査報告書である。

2．調査の主体者は仙台市教育委員会で、宮城県教育委員会に御協力をお願いした。

3．発掘調査は仙台市社会教育課職員佐藤甲二、宮城県文化財保護課職員佐藤則之、笠原信男が担当した。

4．報告書作成のための整理は結城慎一、渡辺誠、佐藤甲二が担当し、編集・執筆は佐藤甲二が行った。

5．本報告書に使用した建設省国土地理院発行の地形図は、図中に示した。

6．全資料は仙台市教育委員会で一括保管してあるので活用されたい。

凡　　例

1．本報告書中の土層の土色については「新版標準土色表」（小林、竹原：1973）を使用した。

2．本報告書使用の層位名として、ローマ数字は基本層位、算用数字は堆積土・埋土を表す。

3．本報告図版内の表現として

(1)　方位は全て磁北を北としている。磁北方向は真北に対して西偏7°0′である。

(2)　土器で中心線が1点鎖線のものは、図上復元実測図である。

発掘調査参加者名

境秀紀　中畑透　長谷川浩一　笹原徳明　滝川清人　高橋孝弘　植田純　下間健志　曽根宏　戸田泰史　廣田正彦　西城潔　近藤宣浩　橋浦知宏　川島浩平　志賀保久　金里徹　小林聡　中島いく子　山田貞子　熊谷光一

遺物整理参加者名

赤井沢千代子　赤井沢進　糸谷明子　笹平克子　神成浩志　小林充　鈴木勝彦　大貫由美子　千葉一　西条裕子　谷津妙子

本　文　目　次

第Ⅰ章　遺跡の位置と環境……1
第Ⅱ章　調査の方法と概要……2
1．調査に至る経過……2
2．調査方法……2
3．基本層位……3
4．調査概要……3
第Ⅲ章　検出遺構と出土遺物……5
1．古墳……5
2．竪穴住居跡……7
3．溝跡……16
4．竪穴遺構……16
5．その他の遺構……20
6．その他の出土遺物……22
第Ⅳ章　遺構の所属年代とまとめ……24
1．遺構の所属年代……24
まとめ……26

挿　図　目　次

第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡……1
第2図　調査対象区位置図……2
第3図　検出遺構全体平面図……4
第4図　古墳周湟平・断面図、出土遺物 (1) ……5
第5図　古墳周湟出土遺物 (2) ……6
第6図　1号住居跡平・断面図……7
第7図　2号住居跡平・断面図、出土遺物……9
第8図　3号住居跡平・断面図……11
第9図　3号住居跡出土遺物……12
第10図　4号住居跡平・断面図……13
第11図　4号住居跡出土遺物 (1) ……14
第12図　4号住居跡出土遺物 (2) ……15
第13図　溝跡、1号竪穴遺構平・断面図…17
第14図　2号竪穴遺構平・断面図、出土遺物……18
第15図　3号竪穴遺構平・断面図、出土遺物……19
第16図　1号土壙出土遺物……21
第17図　2号土壙平・断面図……22
第18図　2号土壙出土遺物……23
第19図　基本層位出土遺物……24

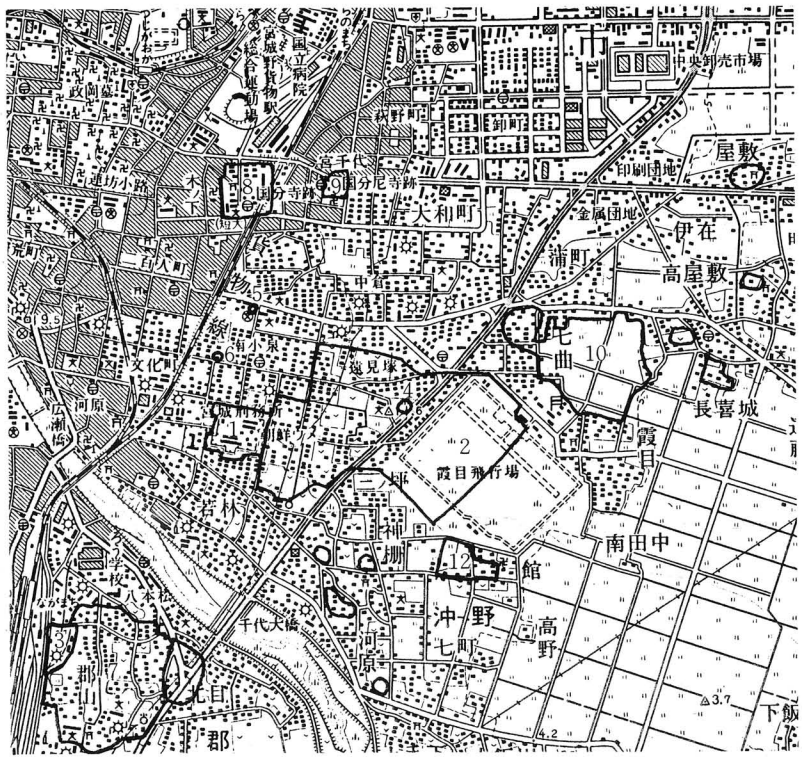
写　真　図　版

図版1　遺跡全景……27
図版2　検出遺構1……28
図版3　検出遺構2……29
図版4　検出遺構3……30
図版5　検出遺構4……31
図版6　検出遺構5……32
図版7　出土遺物1……33
図版8　出土遺物2……34
図版9　出土遺物3……35

第Ⅰ章　遺跡の位置と環境

若林城跡は仙台駅の南東約１kmに位置する。仙台市は西側に丘陵地帯と段丘面が、東側には七北田川、名取川―広瀬川、阿武隈川によって形成された海岸平野が広がる。当遺跡は名取川の支流である広瀬川が形成した、沖積面左岸の自然堤防上（標高約12ｍ）に立地する。遺跡の東には、弥生時代から平安時代までの大集落跡である南小泉遺跡が隣接する。また、北東側、北側１km以内には、東北第３位の規模を誇る遠見塚古墳や法領塚古墳・猫塚古墳が築かれている。

若林城は伊達政宗の晩年に、政宗の隠居所として築かれた居館である（寛永５年）。以前からこの地は「古城（フルジロ）」と呼ばれ、かって古城があったことが仙台古城書上に記されている。若林城の規模は資料が貧しく不明確であるが、惣構の広さは三町四方で、高さ二丈余の土手を築き、周囲に幅三十間の濠を２重にめぐらしていたとされている。政宗の死後（寛永13年）は廃城となり、城内の建物の大半は仙台城二ノ丸等の他の場所へ移築された。その後、城跡内は、明治12年に宮城集治監が建設され、現在の宮城刑務所に至っている。現在、当時の若林城の面影を残すものは城を画する土塁と濠（一重）、西大手の桝形状の土塁、政宗が征韓の役の折持ち返ったとされる臥竜梅である。



No.	遺跡名
1	若林城跡
2	南小泉遺跡
3	西台畑遺跡
4	遠見塚古墳
5	法領塚古墳
6	猫塚古墳
7	郡山遺跡
8	陸奥国分寺跡
9	陸奥国分尼寺跡
10	東郊条里跡
11	北目城跡
12	沖野城跡

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡（国土地理院1/50,000「仙台」を複製）

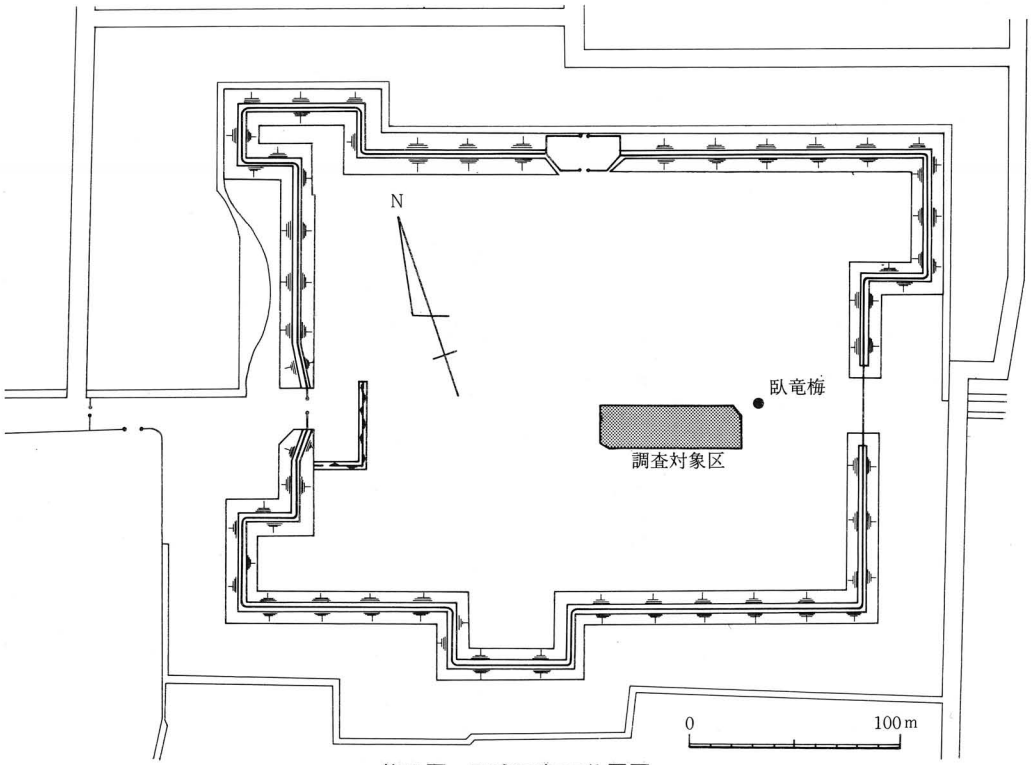
第II章　調査の方法と概要

1．調査に至る経過

宮城刑務所内に新たに職業訓練棟が建てられることとなり、昭和59年５月８日に試掘調査が行なわれた。その結果を踏え、県教育委員会、宮城刑務所三者協議の上、昭和60年７月２日より県教育委員会の協力で、本調査を実施する運びとなった。尚、昭和59年、調査対象区の南西側の構堂建設の際にも調査が行なわれている。40m²程の調査であったが、中世から近世頃のものと思われる掘立柱建物跡１棟とピット群が検出されている。

2．調査方法

調査区は城内の東側中央付近に位置する。調査区の東側約60ｍには東門があり、また北東側約７ｍには臥竜梅が植えられている。調査区は建物予定面積より一まわり大きく設定した（西を除き他は全て１ｍ拡大した。ただし、現在使用されている埋設管部分は除いた）。調査区東西ライン（64.5ｍ）は建物予定部分の東西ラインに合せた。これと直交する南北ラインは磁北より約14°30′東へ傾く。調査は調査区南北ラインを北からＡ～Ｄ、東西ラインを西から１～11とする６×６ｍグリッドで実施した。



第２図　調査対象区位置図

3．基本層位

現表土面のⅠ層から地山面のⅣ層までの大別４層から成り、Ⅲ層はさらにａ・ｂに細分される。

Ⅰ　層：暗褐色(10ＹＲ3/3)シルトｏｒ砂質シルト。現表土層で、レンガ、大礫、鉄クズ、空缶等を含むカク乱層である。50cm前後の層厚であるが、地点によっては１ｍ以上にもなる。

Ⅱ　層：にぶい黄褐色(10ＹＲ4/3)シルトｏｒシルト質粘土。瓦・レンガ等を含む。Ⅰ層のカク乱が加わる以前の明治以降のカク乱層である。層厚は不安定であるが、平均30cm前後である。調査区画全面に認められる。

Ⅲａ層：にぶい黄褐色(10ＹＲ5/4)砂質シルト。 粗砂・マンガン粒を含む、部分的に分布し、調査区北東側では約40cmと厚い。出土遺物はない。

Ⅲｂ層：にぶい黄褐色(10ＹＲ5/3)シルト質粘土。 マンガン粒を少量含む。調査区東側（９ライン以東）部分には分布せず。層厚は30cm前後である。出土遺物はない。

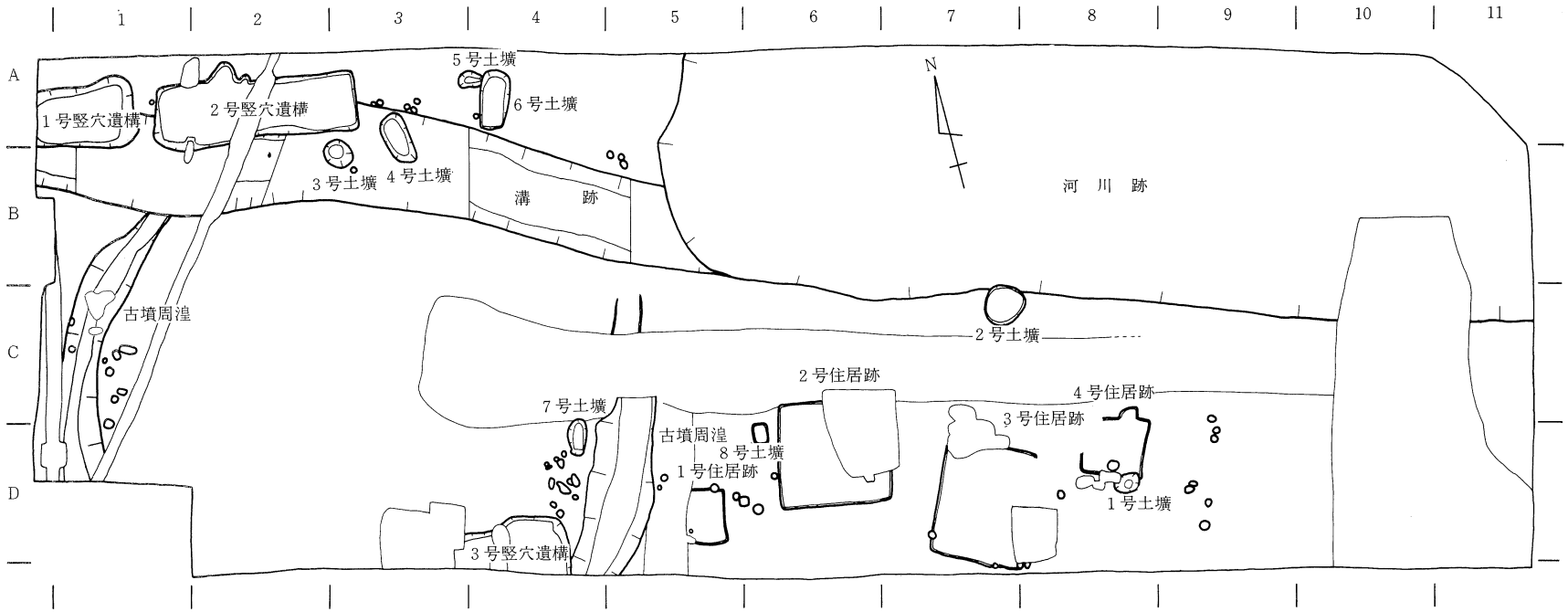
Ⅳ　層：黄褐色(10ＹＲ5/6)シルト質粘土。 当遺跡の地山層である。白色粘土ブロックを含む。上面はⅠ・Ⅱ層の影響（深度） で凸凹状となる。遺構は全て当層の上面で検出される。無遺物層である。

以上のⅠ～Ⅳ層の内、Ⅰ・Ⅱ層は明治以降のカク乱層である。Ⅲ層は自然堆積層と考えられるが、Ⅰ・Ⅱ層の影響で小断片的にしか認められなかった。Ⅳ層も上面がⅠ・Ⅱ層の影響を受け状態が悪いが、調査区内では北東側へやや下って行く。Ⅳ層以下は、Ａ－２グリッドで約80cm下(標高10.50ｍ)、Ｃ－10グリッドでは約130cm下(標高9.40ｍ)で、それぞれ砂礫層となる。尚、若林城にともなう整地層と断定できるものは、今回の調査区内では認められなかった。

4．調査概要

昭和60年７月２日に調査を開始し、８月７日の終了まで実働27日の調査日数を要した。調査面積は1,423m²である。Ⅰ・Ⅱ層は重機により排土を行った。両層はⅣ層上部まで影響を及ぼしている場合が多く、その結果Ⅲ層は小断片的にしか残っておらず、Ⅲ層面で明確な遺構を検出することは不可能であった。従って遺構検出面は全てⅣ層上面となった。

検出遺構には古墳１基（周湟部のみ)、竪穴住居跡４軒、溝跡１条、竪穴遺構３基、土壙８基、ピットがあり、その他に河川跡が１本検出された。これら遺構は上部をⅠ・Ⅱ層による削平を受け、遺存状況は悪かった。出土遺物は４号住居跡を中心として、弥生土器、土師器、須恵器、陶器、瓦、埴輪、鉄製品が平箱（テンバコ28）に４箱程出土した。これらの多くは破片資料である。出土資料中、最も多かったのはロクロ使用の土師器であった。



0　10m

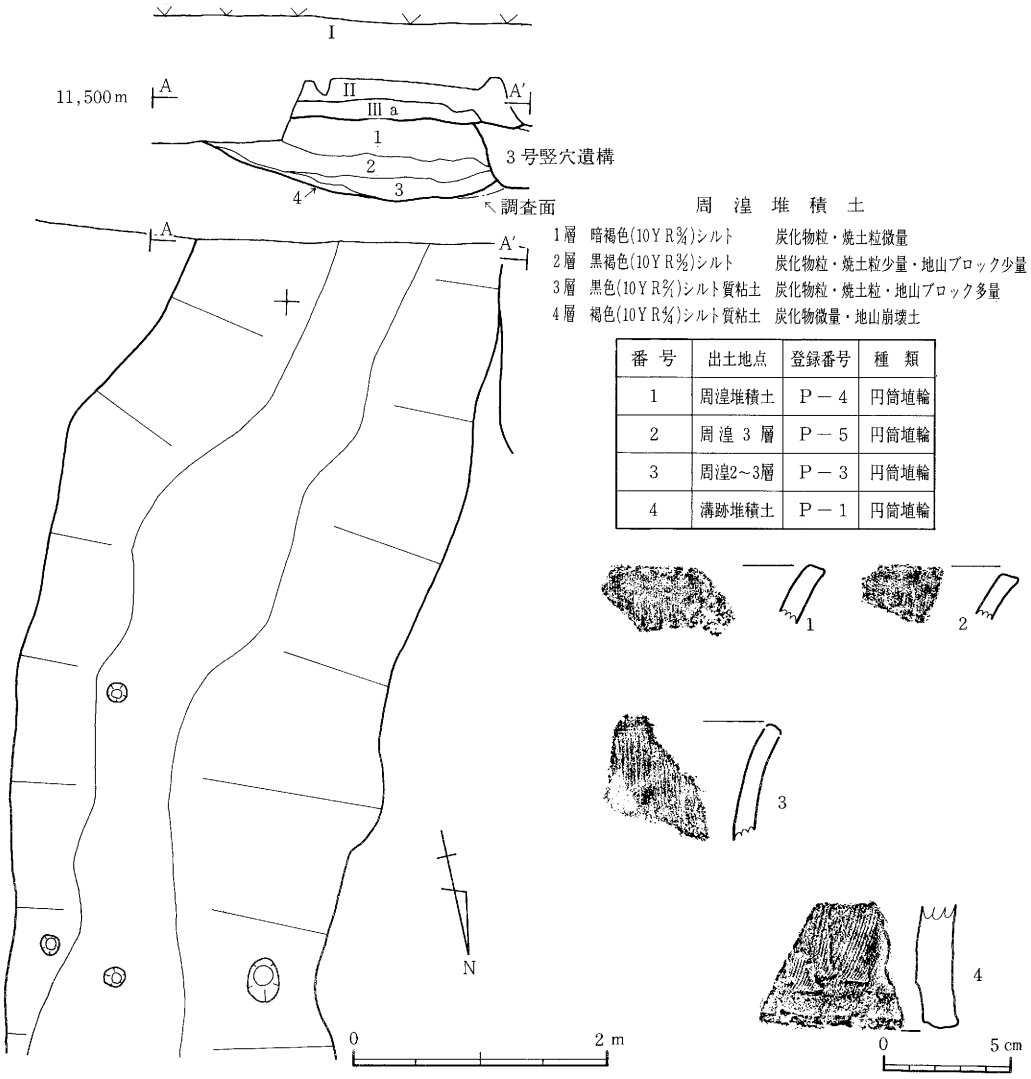
第３図　検出遺構全体平面図

第Ⅲ章　検出遺構と出土遺物

1．古　　墳（第３～５図）

調査区南西側（Ｂ～Ｄ－１～５グリッド）で１基検出された。後世のカク乱により、墳丘はもとより周湟上部もすでに削平され、周湟底面付近が部分的に残存している状況であった。周湟は３号竪穴遺構、溝跡に切られている。

周湟は残存部分が良好な部分で、上端幅約1.5ｍ、深さ60cmである。下端幅は0.5～１ｍで、下端ラインは不明確である。底面は凹状で、壁面は緩かに立ち上る。調査区内に於ける周湟の全体的な形状は、北側を欠くがほぼ円形を呈するものと思われる。周湟内側での直径は約22ｍで



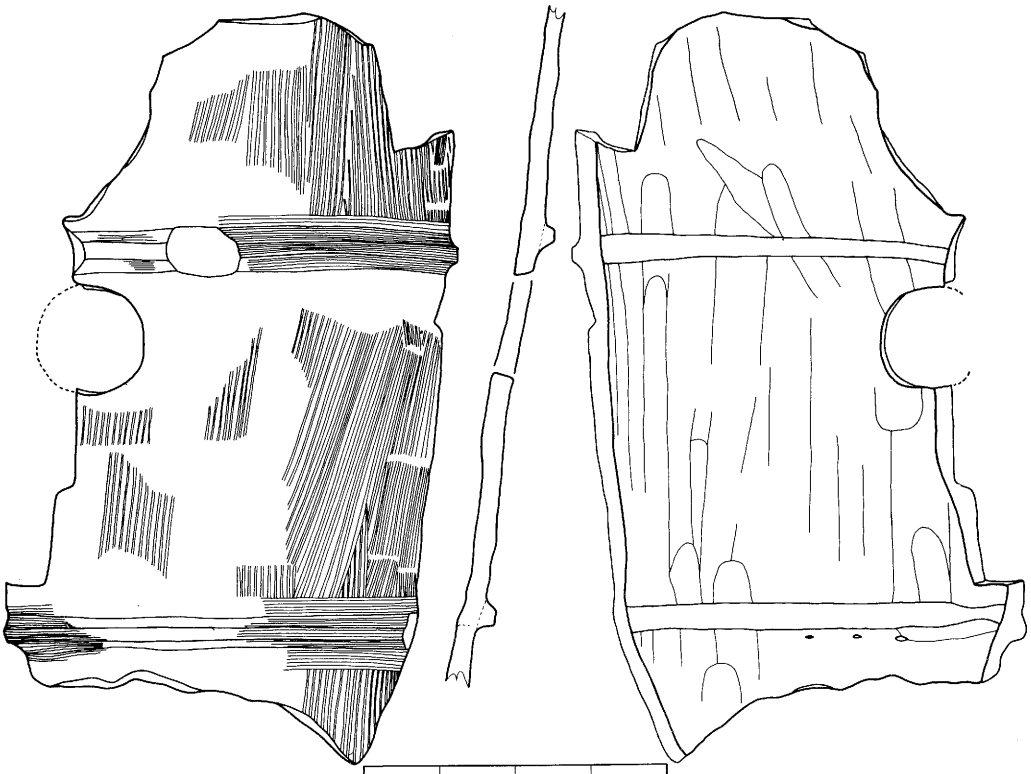
番　号	出土地点	登録番号	種　類
1	周湟堆積土	Ｐ－４	円筒埴輪
2	周湟３層	Ｐ－５	円筒埴輪
3	周湟2～3層	Ｐ－３	円筒埴輪
4	溝跡堆積土	Ｐ－１	円筒埴輪

第４図　古墳周湟平・断面図、出土遺物（I）

ある。周湟の堆積土は４層から成る。１・２層はシルトで、３・４層は粘土質シルトである。各層とも自然堆積状況を示す。

〔出土遺物〕堆積土、底面より土師器片(坏・高坏)、埴輪片が出土した。土師器片は少量の出土である。全て細片で、磨滅が著しいが、非ロクロ使用のものと思われる。埴輪片は比較的多く出土した。

埴輪（第４・５図）：全て円筒埴輪で、口縁部から底部まで続く資料はない。口縁部はかるく外反するもので(第４図１～３)、底部付近はやや直立気味となる(4)。タガは２条貼り付けられており、タガ間の幅は15.5cmである。タガの断面形はほぼ台形状のものや、やや「工」状となるものが認められる。タガ間（上部のタガ付近）には円形のスカシ孔が１個穿たれており、反対側にももう１個穿たれていたものと思われる。スカシ孔の外面径は５cmを測る。外面調整はタガが貼り付けられる以前に縦方向の刷毛目が施こされる。さらにタガ及びその付近、口縁部にはヨコナデが加えられている。内面調整は縦方向のナデ（指ナデ？）が施され、タガ部分ではさらに横方向のナデが施こされた後、口縁部には横ナデが加えられる。色調は赤褐色のものがほとんどで、数例褐色のものも認められた。器面には黒斑のみられるのはない。



出土地点	登録番号	種　類	写真図版
周湟３層	Ｐ－２	円筒埴輪	８－７

0　10cm

第５図　古墳周湟出土遺物 (2)

2．竪穴住居跡

竪穴住居跡は調査区南東側、D－5～8グリッドで、まとまりを持って4軒検出された。ほぼ等間隔を持って東西に並んでおり、住居跡どうしの重複関係はない。各住居跡ともカク乱を受けており、完全なプランを残すものはなく、遺構の遺存状況は悪い。

1号竪穴住居跡（第6図）

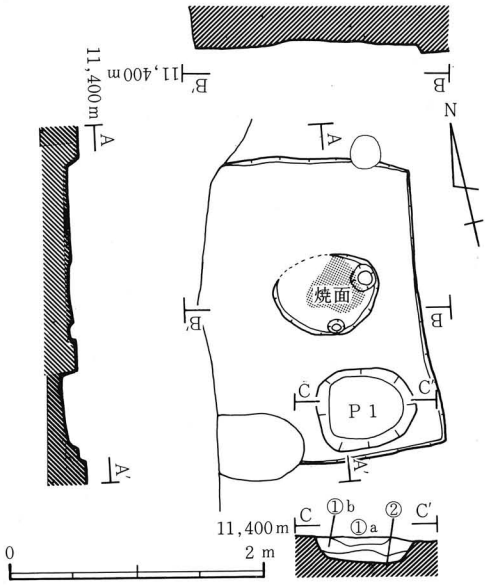
D－5グリッドに位置する。西側半分はカク乱により切られている。残存部分ではカマド、周溝は検出されなかった。

〔規模・平面形〕東西辺は不明であるが、南北辺は約2.4mを測る。平面形は方形を呈するものと思われる。

〔堆積土〕褐色シルトの単層である。

〔壁〕床面から比較的角度をもって立ち上る。壁高は最も残存状況が良好な北壁で10cmを測る。

〔床面〕中央東壁寄りの80×70cmの範囲が浅い窪み状（深さ5cm）となっている。さらにこの内には小ピット状の凹部が2ケ所みられ、中央付近には焼け面が認められた。貼床は施されていない。



1号住居跡堆積土

1層	褐色(10YR¾)シルト	炭化物粒・焼土粒少量、地山ブロック少量
①a層	にぶい黄褐色(10YR¾)シルト	炭化物粒・焼土粒を多く含む
①b層	褐色(10YR¾)シルト	地山ブロック(1cm大)・炭化物粒・焼土粒少量
②層	にぶい黄褐色(10YR⅝)粘土	微量の炭化物粒

第6図　1号住居跡平・断面図

〔ピット〕南東コーナー付近で、貯蔵穴状のP1が1個検出されたのみである。上端・下端平面形とも不整楕円形を呈す。上端規模80×65cm、下端規模60×50cm、深さ30cmを測る。底面はやや凹状となり、断面はひらいた「U」字状である。堆積土は大別2層（細別3層）から成る。

〔出土遺物〕堆積土中より土師器片（坏・高台付坏・甕）、須恵器片（坏）が少量出土したのみである。

2号竪穴住居跡（第7図）

1号住居跡の北東側、D－6グリッドに位置する。北東側（全体の約¼）をカク乱によって切られている。残存部分ではカマド、周溝は検出されなかった。

〔規模・平面形〕南北辺4.3m、東西辺4.8mの長方形を呈する。

〔堆積土〕褐色シルトの単層である。

〔壁〕床面から角度をもって立ち上る。壁高は残存良好な南壁でも15cm前後で、北壁では5cm程の高さしかない。

〔床面〕ほぼ平担である。貼床は施されていない。

〔ピット〕５個検出された。P2～P4はともに柱痕が認められ、規模もほぼ同一のもので、柱穴と考えられる。柱間距離は南北４ｍ、東西1.8ｍである。P1は南東コーナー付近に位置し、上端長辺80cmの隅丸方形状を呈するもので、深さは約30cmを測る。底面は凹状で、断面形は「U」字状である。貯蔵穴と思われる。堆積土は大別２層（細別４層）から成る。

ピット名		上端規模	下端規模	深さ
P1		80×73cm	56×42cm	27cm
P4	柱痕	20×15cm	16×11cm	32cm
	掘り方	35×28cm	25×25cm	26cm

ピット名		上端規模	下端規模	深さ
P2	柱痕	30×24cm	23×16cm	32cm
	掘り方	40×32cm	30×28cm	22cm
P5		40×－cm	34×－cm	18cm

ピット名		上端規模	下端規模	深さ
P3	柱痕	25×22cm	14×11cm	28cm
	掘り方	32×30cm	27×25cm	21cm

〔出土遺物〕堆積土中、P１・２・３・５（堆積土・掘り方）から土師器片(坏・甕)、須恵器片(坏・甕)が出土した。また、弥生土器（桝形囲式）の小破片が１点（写真図版９－１）出土した。この内図示できたものは土師器坏２点、須恵器坏１点である。

土師器

坏（第７図１・２）：いずれも製作に際してロクロを使用している。器形には体部が丸味をもって立ち上り、口縁部が外反するもの（１）と、口縁部がやや直線的に外傾するもの（２）がある。ともに内面調整は底部付近が放射状、口縁～体部が横・斜め方向のヘラミガキの後、黒色処理が施されている。底部の切り離しは回転糸切りで、無調整である。

須恵器

坏（第７図３）：器形は体部から口縁部にかけてやや直線的に外傾する。底部の切り離しは回転糸切りで、無調整である。底部外面には「×」のヘラ記号が認められる。

３号竪穴住居跡（第８・９図）

２号住居跡の南東側、C－7･8グリッドに位置する。北西･南東側はカク乱により切られ、また残りの東側も削平を受け壁面はなく、床面の上部をわずかに残すような状態で検出された。残存部分ではカマド、周溝は検出されなかった。

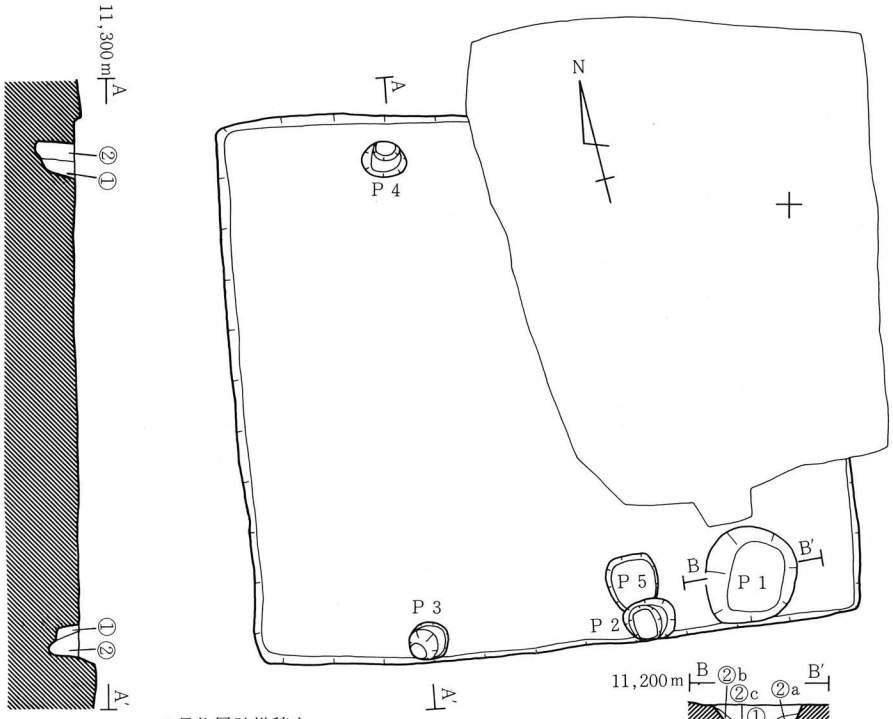
〔規模・平面形〕南北辺５ｍ、東西辺４ｍ強の長方形を呈するものと思われる。

〔堆積土〕２層から成る。黒褐色シルト層の２層中には多量の炭化物、焼土ブロックを含む。

〔壁〕西壁はややきつく立ち上る。壁高は西・南壁で15cm程を測るが、東・北壁では残存状況が悪い。特に東壁では北東コーナーの一部を残すのみである。

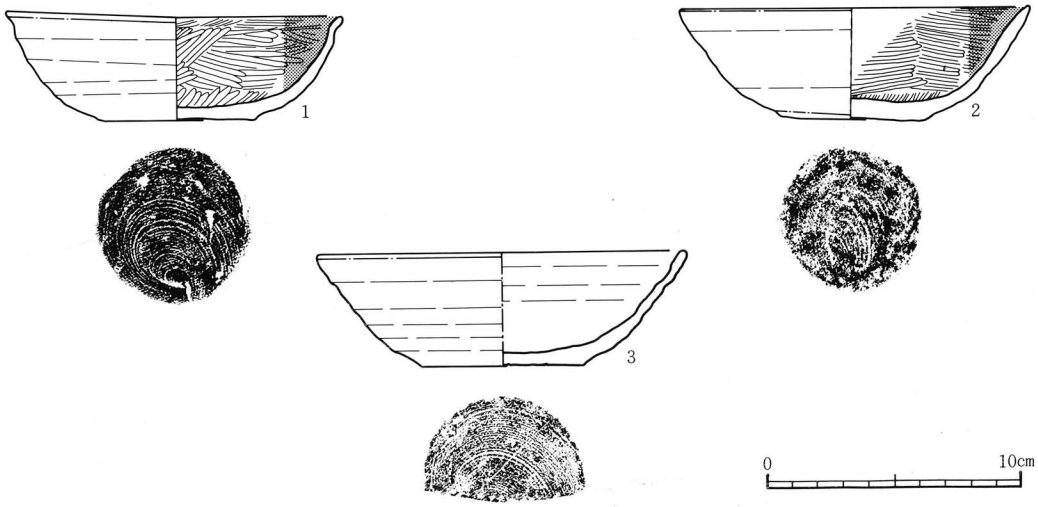
〔床面〕やや凸凹状である。周縁部には幅50～100cm、深さ５～20cmの掘り方がめぐらされ（１点鎖線の外側)、貼り床が施されている。床面のほぼ中央部には、約100×80cmの範囲で強い焼け面が認められた。

〔ピット〕５個検出された。柱痕の認められたものはない。P4･P5は柱穴になる可能性もある。



2号住居跡堆積土

	1層	褐色(10YR4/4)シルト	鉄分縦縞状。マンガン粒多量
P1	①層	褐色(10YR4/4)シルト	炭化物粒少量、焼土粒少量
	②a層	にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質粘土	マンガン粒・炭化物粒微量
	②b層	黒褐色(10YR2/2)シルト質粘土	炭化物ブロック、焼土ブロック(1cm大)を含む
	②c層	灰黄褐色(10YR5/2)シルト質粘土	炭化物粒・焼土粒少量
P2~4	①掘り方埋土	にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質粘土	地山ブロック(1cm大)を多量、微量の炭化物粒、焼土粒
	②柱痕	暗褐色(10YR3/4)シルト質粘土	炭化物粒・焼土粒少量
P5	①層	暗褐色(10YR3/4)シルト	炭化物ブロック・焼土ブロック(1cm大)多量



番号	出土地点	登録番号	種　類	残存	法量cm（　）は復元値				写真図版
					口径	底径	器高	底径/口径	
1	Pit1 2b層	D-1	土師器不	2/5	(13.3)	6.2	4.3	0.47	7-1
2	1　層	D-2	土師器坏	3/4	13.8	5.5	4.6	0.40	7-2
3	Pit1 2b層	E-1	須恵器坏	2/5	(14.6)	6.4	4.5	0.44	7-9

第7図　2号住居跡平・断面図、出土遺物

P1は南東コーナーに位置し、上端長辺110cmの隅丸長方形を呈するもので、深さは50cm以上と深い。底面はやや凸凹状で、壁はきつく立ち上る。貯蔵穴と思われる。堆積土は大別２層（細別４層）から成る。

ピット名	上端規模	下端規模	深さ	ピット名	上端規模	下端規模	深さ	ピット名	上端規模	下端規模	深さ
P１	110×95cm	65×55cm	56cm	P２	50×45cm	40×35cm	15cm	P３	60×55cm	45×45cm	17cm
P４	23×23cm	18×16cm	21cm	P５	22×22cm	19×16cm	18cm				

〔出土遺物〕堆積土中、P１～３(堆積土)、貼床より土師器(坏・甕)、須恵器(坏・壺・甕)、石製品(紡錘車)、風化し識別不能な鉄製品が出土した。床面からは小鉄滓が１点出土したのみである。これらの内、図示できたものは土師器坏２点・甕３点、須恵器坏１点、紡錘車１点である。

土師器

坏(第９図１・２)：いずれも製作に際してロクロを使用している。器形は体部が丸味をもって立ち上り、口縁が（かるく）外反する。内面調整は底部付近が放射状、口縁～体部が横・斜め方向のヘラミガキの後、黒色処理が施されている。底部の切り離しは両者とも磨滅のため不明隙であるが、回転糸切りで無調整のものと思われる。

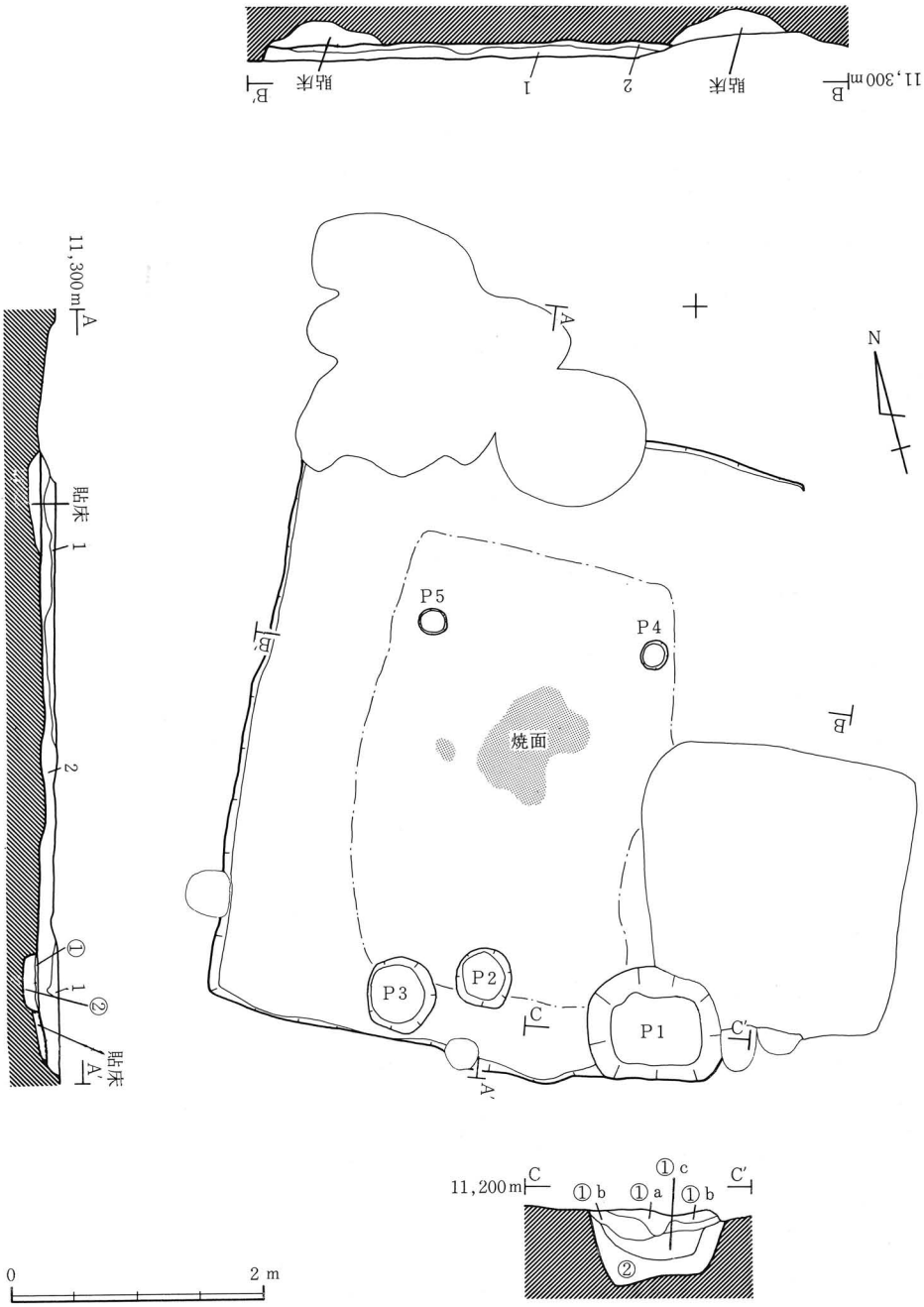
甕（第９図４～６）：いずれも製作に際してロクロを使用している。大型のもの（５・６）と小型のもの(４)がある。大型のものは口縁～体部資料で、長胴のものである。口縁部は外反し、口縁部端部は上方へ摘み上げられている。５は最大径を口縁部に持つ。内外面調整はロクロナデの後、外面下半はヘラケズリ、内面下半はナデが施されている。６は最大径を体部上半に持つ。内外面調整ともロクロナデである。小型のものは口径より器高が低く、最大径を口縁部に持つ。口縁部形態は大型のものと同様である。内外面調整ともロクロナデである。底部の切り離しは回転糸切りで、無調整である。

須恵器

坏（第9図３）：器形は体部から口縁部まで丸味をもって外傾する。底部の切り離しは回転糸切りで、無調整である。

石製品

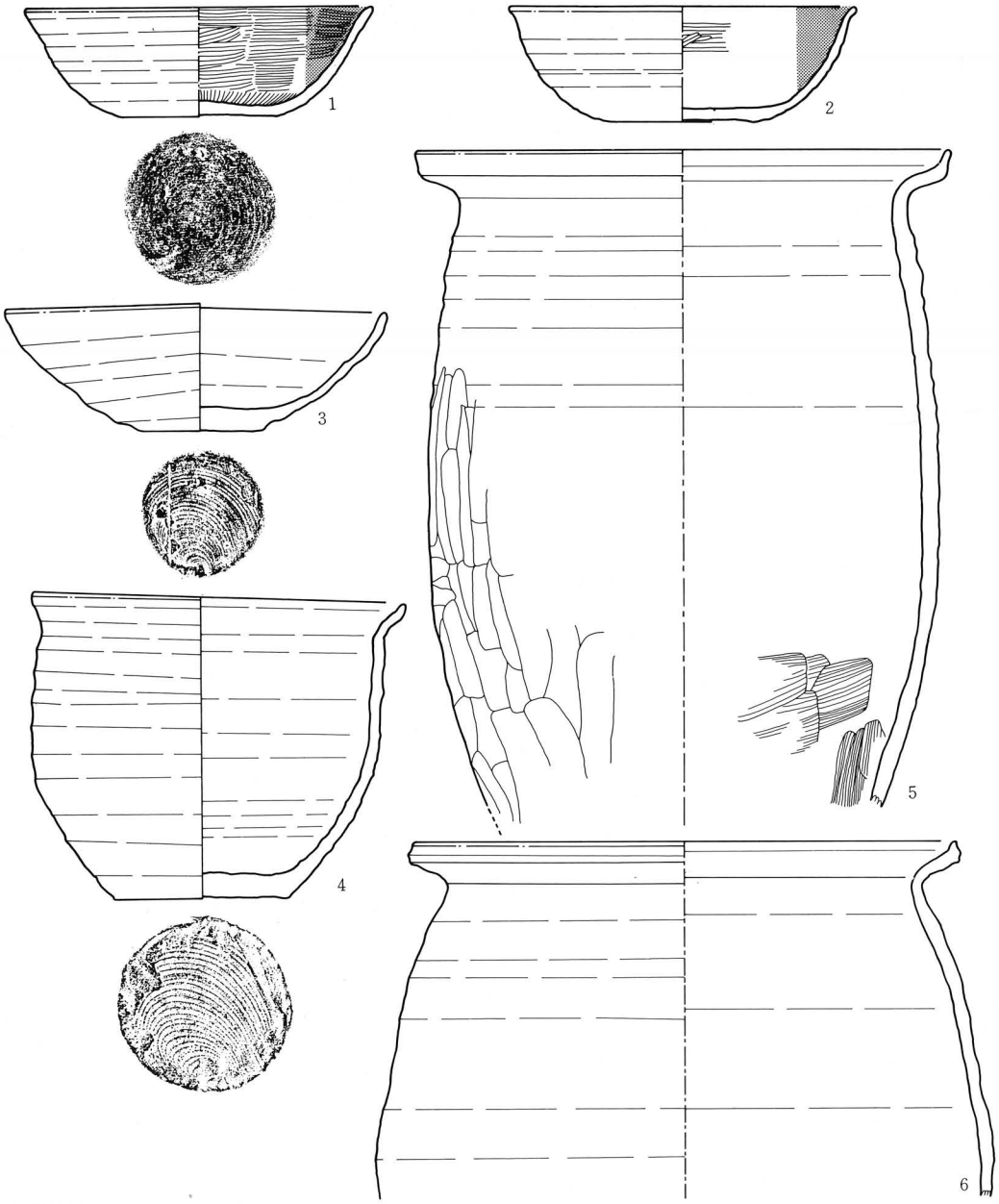
紡錘車（第9図・7）：¼の破片資料である。扁平なもので中央に小孔が穿たれている。断面形はやや台形状を呈す。上面周縁部は面とりがされ、全面に明瞭な擦痕が認められる。上・下面径推定5.6・6.0cm、孔径0.6cm、厚さ1.0cmを測る。



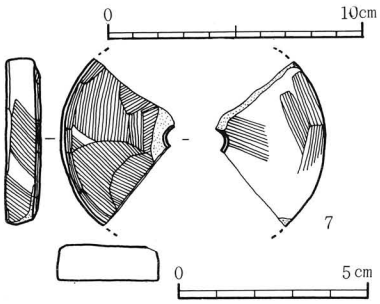
3 号 住 居 跡 堆 積 土

	1層	褐色(10YR⅝)シルト	炭化物粒・焼土粒少量
	2層	黒褐色(10YR3/2)シルト	炭化物(木炭)多量、焼土粒多量、焼土ブロック少量
	貼り床	褐色(10YR⅝)シルト質粘土	炭化物粒・焼土粒微量
P1	①a層	黒褐色(10YR2/2)シルト	炭化物・焼土ブロック多量
	①b層	にぶい黄褐色(10YR⅝)シルト質粘土	炭化物粒・焼土粒・下層土をブロック状に少量
	①c層	暗褐色(10YR3/3)シルト質粘土	炭化物粒、焼土粒少量、炭化物、焼土ブロック微量
	②層	にぶい黄橙色(10YR⅝)粘土	マンガン粒、下面に鉄分集積
P2	①層	暗褐色(10YR3/3)シルト質粘土	炭化物粒・焼土粘微量
	②層	黒褐色(10YR3/2)シルト質粘土	炭化物・焼土・地山ブロック多量
P3	①層	褐色(10YR⅝)シルト質粘土	炭化物粒・焼土粒微量。Pit2①層と類似
	②層	黒褐色(10YR3/2)シルト質粘土	炭化物・焼土粒を少量
P4・5	①層	黒褐色(10YR3/2)シルト質粘土	炭化物多量・焼土粒少量

第8図　3号住居跡平・断面図



番号	出土地点	登録番号	種類	残存	法量cm（ ）は復元値					写真図版
					口径	体径	底径	器高	底径／口径	
1	2 層	D-6	土師器坏	3/5	14.4	—	6.2	4.4	0.43	7-3
2	2 層	D-7	土師器坏	1/4	(14.2)	—	(5.6)	4.8	0.39	—
3	Pitl 1a層	E-6	須恵器坏	1/1	15.7	—	5.1	5.3	0.32	7-10
4	Pitl 1a層	D-5	土師器甕	4/5	15.4	14.2	7.1	12.4	—	8-2
5	Pitl 1c層	D-3	土師器甕	1/4	(21.9)	(20.8)	—	—	—	—
6	Pitl 1c層	D-4	土師器甕	1/4	(22.5)	—	—	—	—	—
7	1 層	K-2	石製紡錘車	1/4	—	—	—	—	—	9-7



第9図　3号住居跡出土遺物

４号竪穴住居跡（第10～12図）

３号住居跡の北東側、Ｃ・Ｄ－８グリッドに位置する。南側を１号土壙、ピット、カク乱に切られている。上部をかなり削平されており、壁の残存は悪く、北東コーナーでは不明確である。周溝は検出されなかった。

〔規模・平面形〕壁の残存状態が悪く、明確な平面形は把握できなかったが、１辺2.6前後の正方形状のプランを呈するものと思われる。

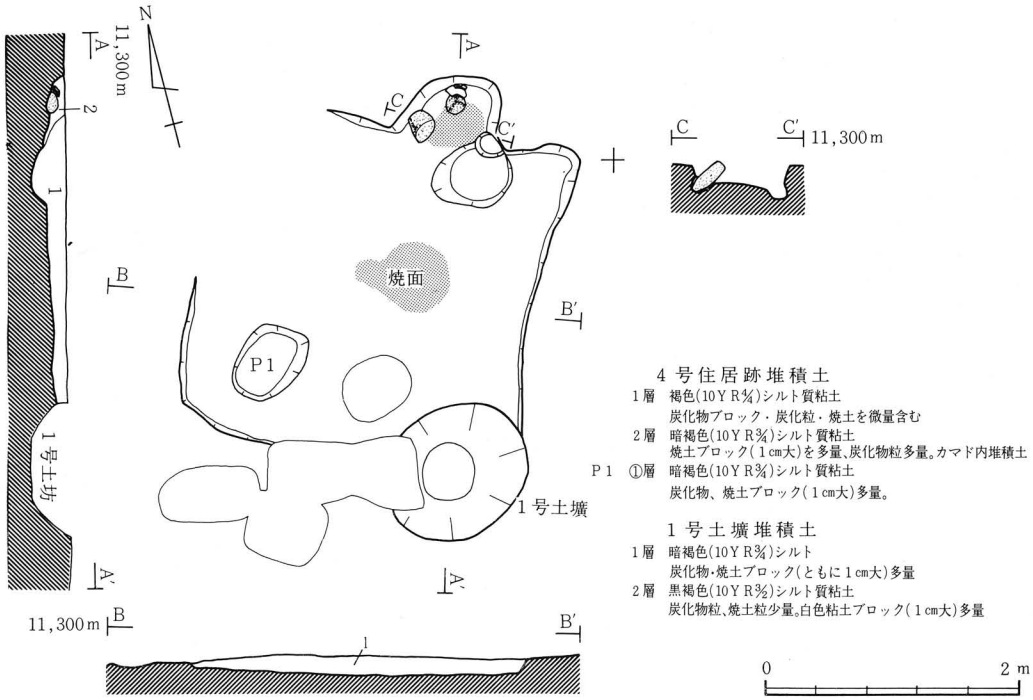
〔堆積土〕２層から成る。カマド上の堆積土２層はカマド崩落土と考えられる。

〔壁〕東壁は比較的残存状態が良く、壁高は12cmを測る。底面からの立ち上りは急角度である。

〔床面〕ほぼ平坦である。中央付近に70×50cmの範囲で焼け面が認められた。貼床は施されていない。

〔ピット〕南西コーナー付近でＰ１が検出されたのみである。上端・下端規模65×50cm・55×35cm、深さ26cmを測る。堆積土は単層である。

〔カマド〕北壁中央よりやや東側に位置する。北壁を掘り込んで燃焼部が作られている。燃焼部はやや凹状で、幅・奥行きとも50cmを測る。中央奥壁寄りには支脚用の円礫が、下端を少し埋め込むような状態で置かれていた。また支脚用礫上には土師器の小型甕の体部～底部破片（½残存、第12図４）が、被せたような状態で出土した。焚き口付近の袖には礫が使用されていたらしく、下端を床に埋め込んだ礫が、焚き口付近と思われる場所の西側より１個出土した。反



第10図　４号住居跡平・断面図

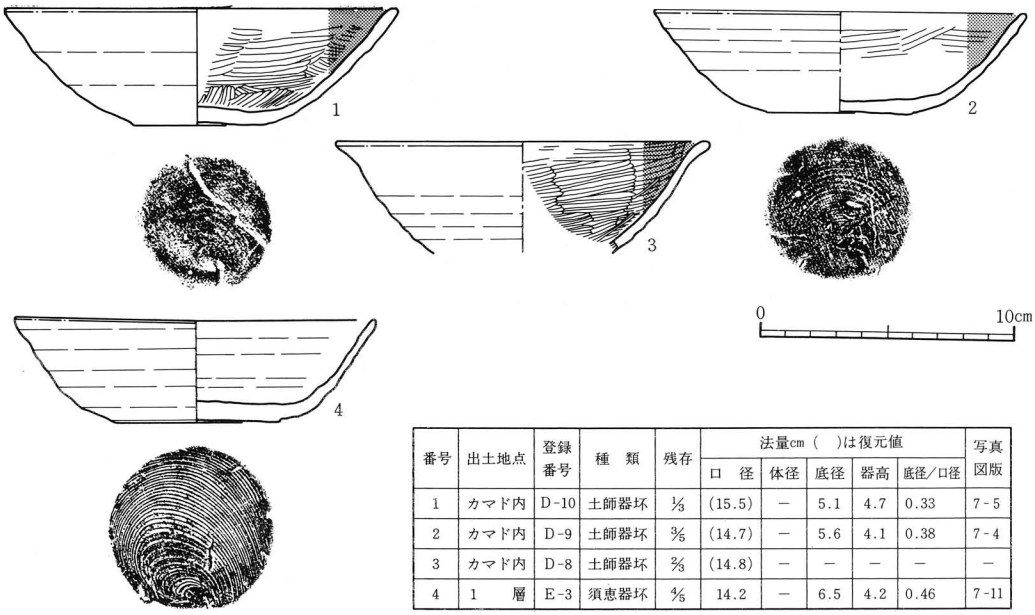
対側のほぼ同位置にも礫の据え方が認められた（これに接する南側には抜き取り穴が認められた）。支脚と袖石を結ぶ範囲内は、強い焼け面がみられた。

〔出土遺物〕堆積土中、カマド内より土師器(坏・甕)、須恵器(坏・甕)、石製品(砥石)が出土した。これらの内、図示できたものは土師器坏３点・甕５点、須恵器坏１点、砥石１点である。

土師器

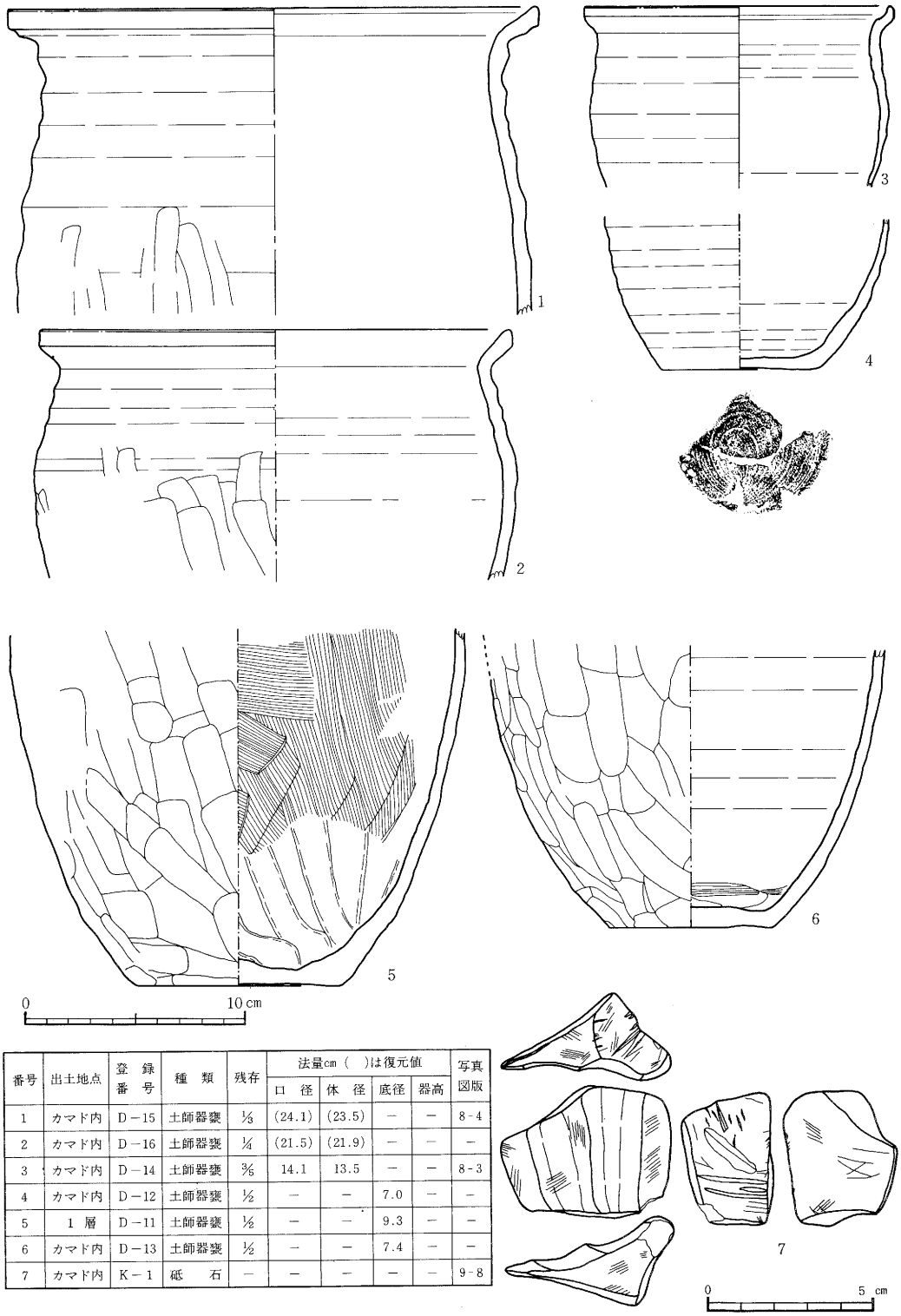
坏（第11図１～３）：いずれも製作に際してロクロを使用している。器形には体部から口縁部にかけてやや直線的に外傾するもの(１)、体部は丸味をもって外傾し、口縁部が外反するもの(３)と口縁部がやや直線的に外傾するもの(２)がある。内面調整は底部付近が放射状、口縁～体部が横・斜め方向のヘラミガキの後、黒色処理が施されている。１・２の底部切り離しは回転糸切りで、無調整である。３は高台が付く可能性もある。

甕（第12図１～６）：口縁部から底部まで続く資料はない。口縁～体部上半資料には大型のもの（１・２）と小型のもの（３）がある。大型のものは長胴になるものと思われる。１は口径と体径がほぼ同じである。口縁部は外反し、口縁端部は上方へやや摘み上げられている。外面調整はロクロナデの後、体部下半にヘラケズリが加えられる。内面調整は磨滅のため不明瞭であるがロクロナデと思われる。２も口径･体径ともほぼ同じもので､口縁部は外反し、口縁端部は肥厚する。外面調整はロクロナデの後、体部下半にヘラケズリ、内面調整はロクロナデである。小型のものは最大径を口径にもつもので、器高より口径の方が大きいものと思われる。口縁部は外反し、口縁端部は上方へ摘み上げられる。内外面調整ともロクロナデである。体部



番号	出土地点	登録番号	種　類	残存	法量cm（　）は復元値					写真図版
					口　径	体径	底径	器高	底径／口径	
1	カマド内	D-10	土師器坏	⅓	(15.5)	—	5.1	4.7	0.33	7-5
2	カマド内	D-9	土師器坏	⅗	(14.7)	—	5.6	4.1	0.38	7-4
3	カマド内	D-8	土師器坏	⅔	(14.8)	—	—	—	—	—
4	1　層	E-3	須恵器坏	⅝	14.2	—	6.5	4.2	0.46	7-11

第11図　４号住居跡出土遺物（1）



番号	出土地点	登録番号	種類	残存	法量cm（ ）は復元値				写真図版
					口径	体径	底径	器高	
1	カマド内	D－15	土師器甕	⅓	(24.1)	(23.5)	－	－	8-4
2	カマド内	D－16	土師器甕	¼	(21.5)	(21.9)	－	－	－
3	カマド内	D－14	土師器甕	⅚	14.1	13.5	－	－	8-3
4	カマド内	D－12	土師器甕	½	－	－	7.0	－	－
5	1層	D－11	土師器甕	½	－	－	9.3	－	－
6	カマド内	D－13	土師器甕	½	－	－	7.4	－	－
7	カマド内	K－1	砥石	－	－	－	－	－	9-8

第12図　4号住居跡出土遺物（2）

下半～底部資料にも大型のもの（５・６）と小型のもの（４）がある。大型のもの外面調整は体部がヘラケズリ、底部ナデ、内面調整は体部がヘラナデ、体部下半～底部がナデツケである。小型のものは内外面ともロクロナデ調整で、底部の切り離しは回転糸切りで、無調整である。

須恵器

坏（第11図１）：器形は体部が丸味をもって立ち上り、口縁部がやや直線的に外傾する。底部の切り離しは回転糸切りで、無調整である。

石製品

砥石（第12図７）：小型の不整形なものである。全面に擦痕が認められる他、表面には２条の幅広い溝状の凹面がみられる。

３．溝　　跡（第３・13図）

調査区北西側、Ａ・Ｂ－１～５グリッドにかけて１条検出された。やや蛇行しながら東西方向（Ｎ－68°－Ｗ）に走行するが、Ｂ－５グリッドで河川跡に切られ東へ延びていない。また、上面を１・２号竪穴遺構、土壙、ピットに切られている。上端幅は約４ｍ、下端幅は1.5ｍ～2ｍ、深さは上面の削平の度合によって異なり60～110cmを測る。底面はＢ－４グリッド付近は平坦であるが、Ａ・Ｂ－1・2グリッド付近では強い凹状を呈す。底面の標高はＡ－１グリッドで10.07ｍ、Ｂ－５グリッドで10.32ｍと約20cmの差がみられる。壁は緩かに立ち上る。堆積土はＢ－５グリッドの観察では６層から成る。１～５層はシルト質粘土であるが、３層には砂、2・5層には小礫を含み、最下層６層は砂質シルトであることより、２層以下は水の影響の下に堆積したことが考えられる。

〔出土遺物〕堆積土中より非ロクロ使用の土師器（坏・甕）、ロクロ使用の土師器（坏・高台付坏・甕）、須恵器（甕）、埴輪（円筒埴輪）の細片を出土した。

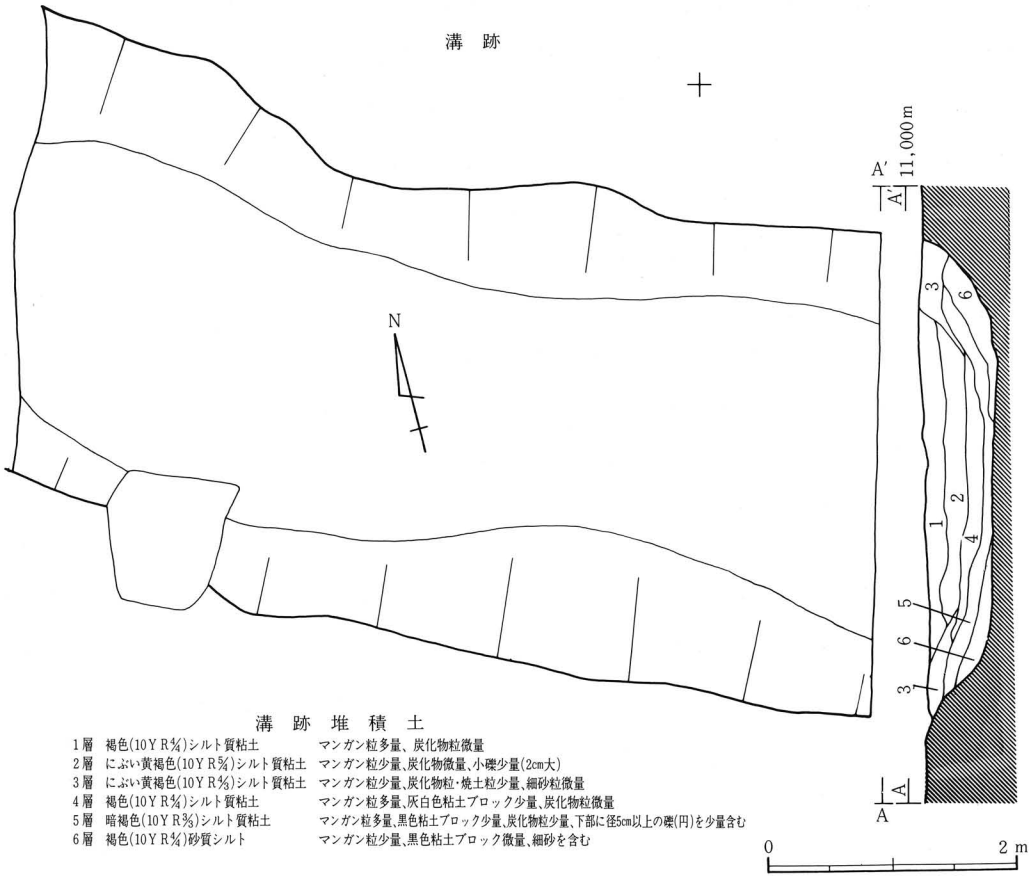
４．竪穴遺構

調査区西側の北と南で３基検出された。北側の１・２号は約１ｍの間隔で東西に並ぶ。いずれも不整方形状のもので、底面には柱穴やその他の施設を持たない。またいずれも長辺を同一方向（東西）に向けている。

１号竪穴遺構（第13図）

Ａ－１グリッドに位置する。西側の上端は調査区外に延び不明である。溝跡を切っている。上端・下端平面形とも不整隅丸長方形を呈す。上端規模5.0？×3.0ｍ、下端規模3.2×1.7ｍ、深さ50cmを測る。壁には底面から約30cmの高さで段が形成されている。壁は段を挟んだ上下とも緩やかな立ち上りを示すが、段より下の方がやや緩やかである。底面は中央が凹状となる。堆積

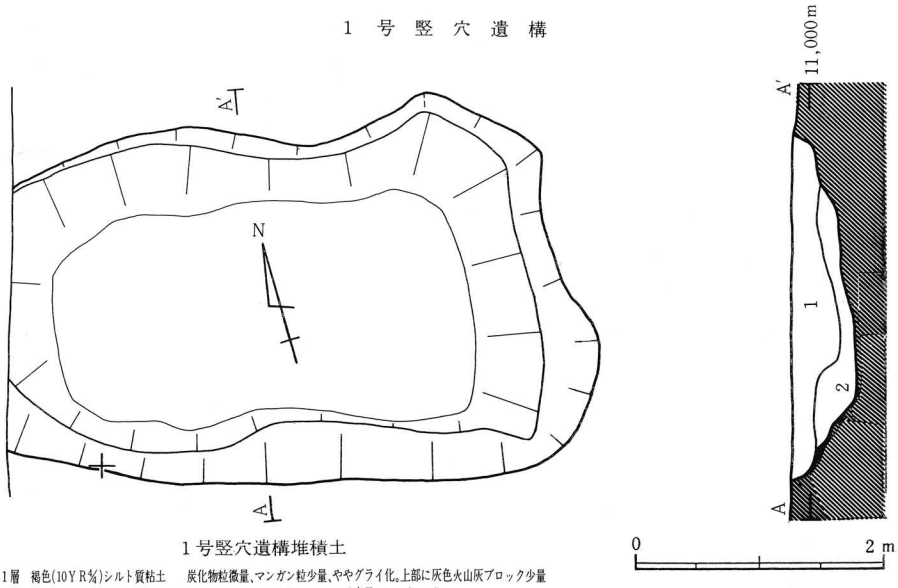
溝　跡



溝　跡　堆　積　土

1層　褐色(10YR4/4)シルト質粘土　マンガン粒多量、炭化物粒微量
2層　にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質粘土　マンガン粒少量、炭化物微量、小礫少量(2cm大)
3層　にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質粘土　マンガン粒少量、炭化物粒・焼土粒少量、細砂粒微量
4層　褐色(10YR4/4)シルト質粘土　マンガン粒多量、灰白色粘土ブロック少量、炭化物粒微量
5層　暗褐色(10YR3/3)シルト質粘土　マンガン粒多量、黒色粘土ブロック少量、炭化物粒少量、下部に径5cm以上の礫(円)を少量含む
6層　褐色(10YR4/4)砂質シルト　マンガン粒少量、黒色粘土ブロック微量、細砂を含む

1　号　竪　穴　遺　構



1号竪穴遺構堆積土

1層　褐色(10YR4/4)シルト質粘土　炭化物粒微量、マンガン粒少量、ややグライ化。上部に灰色火山灰ブロック少量
2層　暗褐色(10YR3/3)シルト質粘土　炭化物粒　焼土粒を少量。マンガン粒多量。ややグライ化

第13図　溝跡、1号竪穴遺構平・断面図

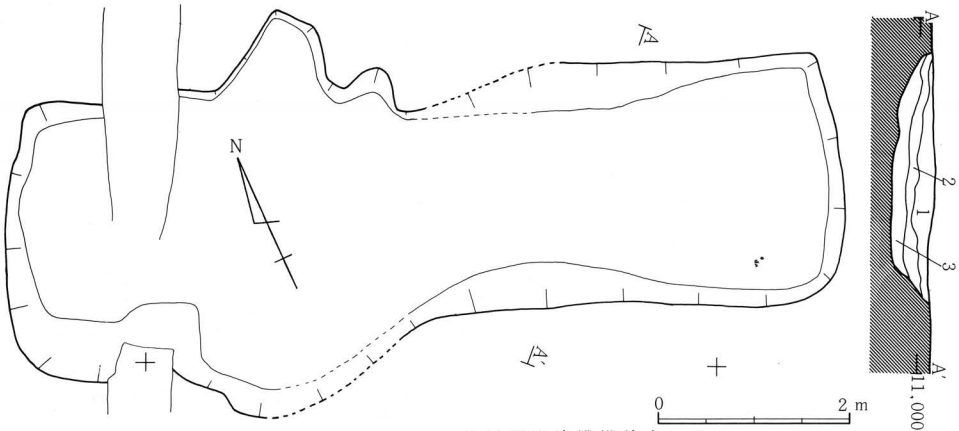
土は２層から成り、自然堆積状況を示す。１層上部には灰白色火山灰の小ブロックを含む。
〔出土遺物〕土師器（坏・甕）、風化し識別不明な鉄製品の細片が、堆積土中より少量出土したのみである。

２号竪穴遺構（第14図）

Ａ－１～３グリッドにまたがって位置する。溝跡を切っている。中央部は南北に走る埋設管部分（幅約１ｍ）のため調査が不可能であった(破線部分)。上端・下端平面形とも中央部がやや括れ、西側が不整形に脹らむ。上端規模8.8×2.6～4.3ｍ、下端規模8.5×1.6～3.9ｍ、深さ40cmを測る。壁は緩やかに立ち上り、底面は凹凸状である。堆積土は３層から成り、自然堆積状況を示す。堆積土１層中には灰白色火山灰のブロックを少量含む。
〔出土遺物〕土師器片（坏・高台付坏・甕）、須恵器片（坏）が堆積土中より少量出土した。図示できたものは須恵器坏１点である。

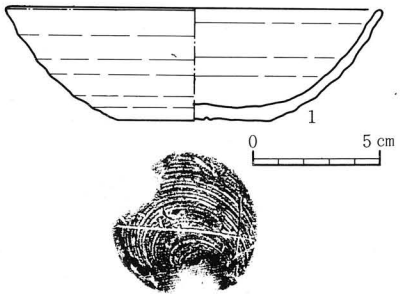
須恵器

坏（第14図１）：器形は体部から口縁部まで丸味をもって外傾する。底部の切り離し技法は回転糸切りで、無調整である。底部外面には「×」のヘラ記号が認められる。



２号竪穴遺構堆積土

1層　褐色(10YR4/4)シルト質粘土　炭化物粒・焼土粒少量、マンガン粒・灰白色火山灰ブロックを少量
2層　にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質粘土　マンガン粒少量、鉄分縦縞状に散在
3層　暗褐色(10YR3/4)シルト質粘土　炭化物粒・焼土粒少量、マンガン粒多量



出土地点	登録番号	種類	残存	法量cm(　)は復元値			
				口径	底径	器高	底径／口径
堆積土	E－4	須恵器坏	1/5	(14.8)	5.9	4.5	4.0

第14図　２号竪穴遺構平・断面図、出土遺物

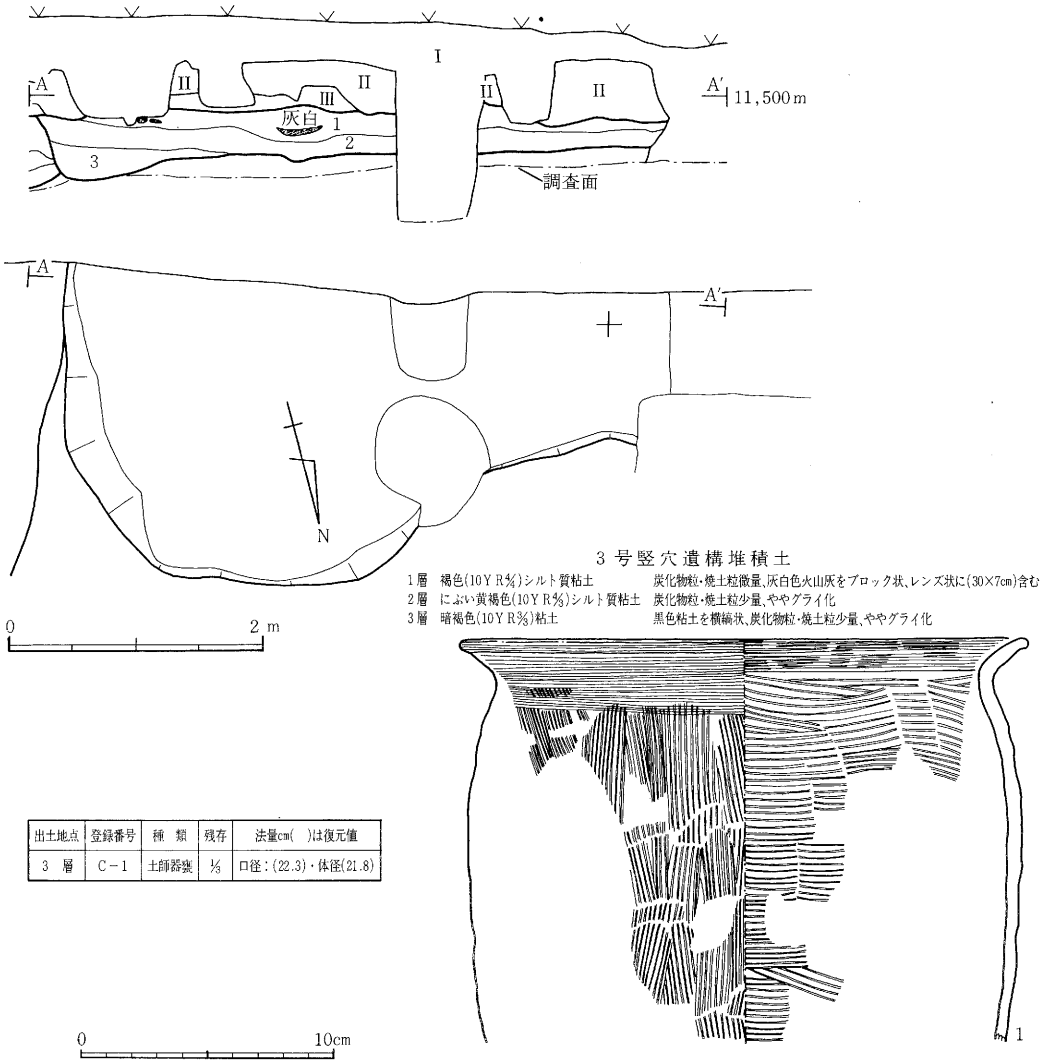
３号竪穴遺構

Ｄ－３・４グリッドに位置する。古墳の周湟を切っている。南側は調査区外へ延び不明である。西側もカク乱に切られている。上端・下端平面形とも不整方形を呈するものと思われる。上端規模5.5×3.0ｍ以上、下端規模5.0×2.5ｍ以上、深さ40～50cmを測る。壁はややきつく立ち上る。底面はやや凸凹状となる。堆積土は３層から成り、自然堆積状況を示す。１層中にはレンズ状に灰白色火山灰の塊が認められる。

〔出土遺物〕土師器片(甕)、埴輪片（円筒埴輪）が少量出土した。全て堆積土中よりの出土である。図示できたものは土師器甕１点である。

土師器

甕（第15図１）：製作に際してロクロを使用していないものである。口縁～体部にかけての



出土地点	登録番号	種　類	残存	法量cm(　)は復元値
3　層	C－1	土師器甕	⅓	口径：(22.3)・体径(21.8)

第15図　３号竪穴遺構平・断面図、出土遺物

資料である。口縁部が外反し、体部上半がやや膨む器形で、口径と体径はほぼ等しい。外面調整は体部が縦方向の刷毛目の後、口縁部はヨコナデで、内面調整は口縁部から体部にかけて横方向の刷毛目の後、口縁部にはヨコナデが施されている。

5．その他の遺構

その他の遺構として土壙、ピットがある。遺物を出土するものが少なく、これらの内には明治以降のものも含まれている恐れもある。また、遺構とは言い難いが、河川跡が１本検出されている。

土　壙

８基検出された。１号土壙（第10・16図）は４号住居跡の南東コーナー付近を切っている。上端平面形１×1.2ｍの楕円形で、深さは30cmを測る。堆積土は２層から成る。ともにシルトで１層中には炭化物、焼土粒を含む。底面から浮いた状態ではあるが、土師器、須恵器がまとまって出土した。２号土壙（第17・18図）はＣ－７グリッドに位置する。上端・下端平面形とも円形を呈する円筒状の土壙である。上端径150cm、下端径85cm、深さ85cmを測る。底面付近より瓦がまとまって出土した。他の３～８号までの土壙からは出土遺物はなかった。

土壙番号	地区	平面形		規模 cm			堆積土数	出土遺物	土壙番号	地区	平面形		規模 cm			堆積土数	出土遺物
		上端	下端	上端	下端	深さ					上端	下端	上端	下端	深さ		
1	D－8	楕円形	円	120×100	40	30	2	土師器・須恵器	2	C－7	円	円	170	150	85	1	瓦
3	B-2-3	楕円形	円	130×115	60	65	1	無	4	A・B-3	楕円	楕円	230×110	170× 75	54	1	無
5	A-3-4	楕円形	不整楕円形	110× 65	75×30	8	1	無	6	A－4	隅丸長方形	隅丸長方形	260×125	215×100	18	1	無
7	D－4	楕円形	楕円形	160× 80	115×40	5	1	無	8	D－6	長方形	長方形	90× 65	75× 50	9	1	無

〔１号土壙出土遺物〕

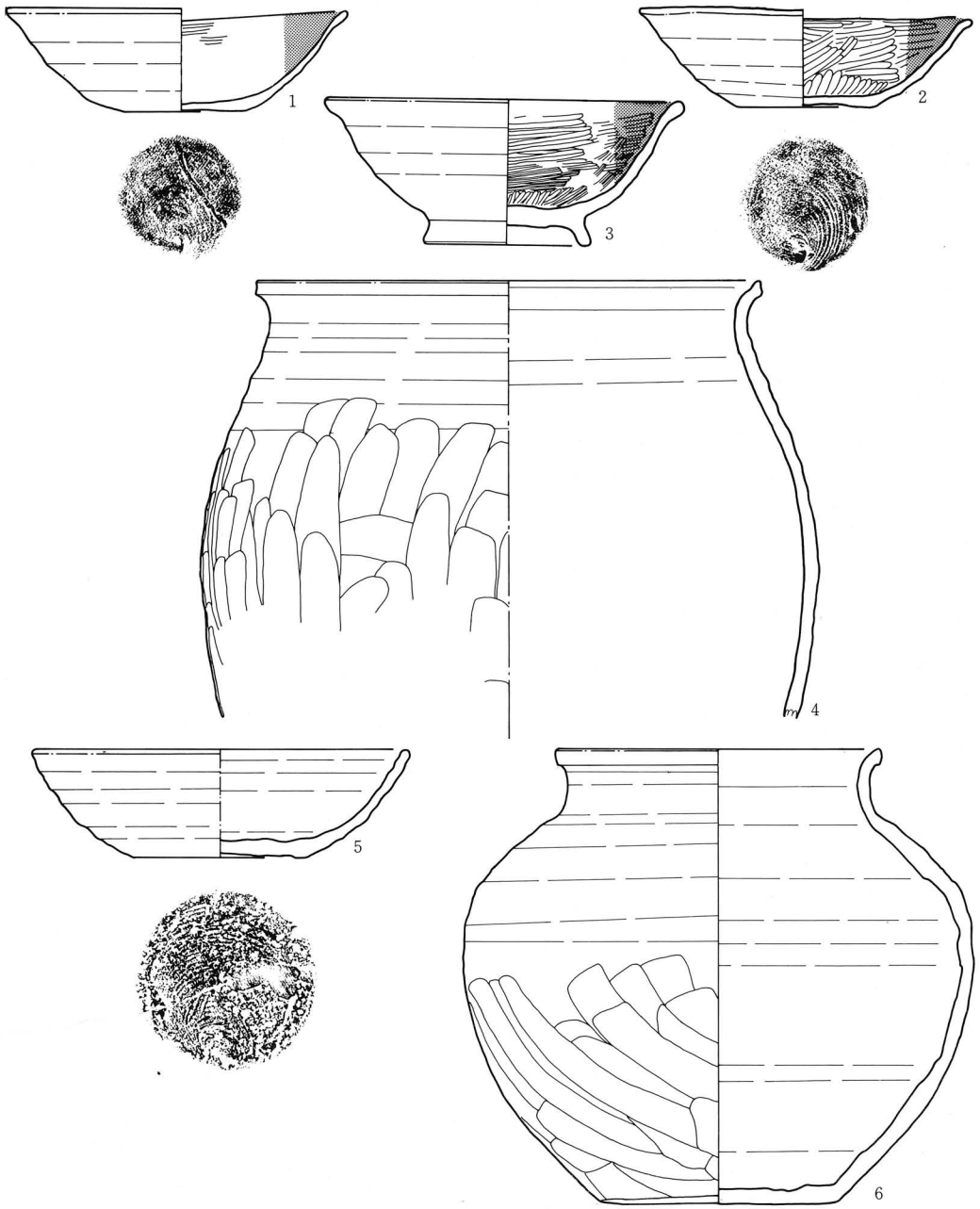
土師器（坏・高台付坏・甕）、須恵器（坏・壺）が出土した。この内、図示できたものは土師器坏２点・高台付坏１点・甕１点、須恵器坏１点・壺１点である。

土師器

坏（第16図１・２）：いずれも製作に際してロクロを使用している。器形は体部が丸味をもって立ち上り、口縁部が外反する。内面調整は底部付近が放射状、口縁～体部が横・斜め方向のヘラミガキの後、黒色処理が施されている。底部の切り離し技法は回転糸切りで、無調整である。

高台付坏（第16図３）：製作に際してロクロを使用している。坏部の器形・調整・底部の切り離し技法は坏と同様である。高台部は「八」の字状の付高台で、底部周縁及び高台内外面にロクロナデを施している。

甕（第16図４）：製作に際してロクロを使用している。体部下半を欠失する。最大径は体部上半に持つ、長胴のものである。口縁部は外反し、口縁端部はやや上方へ摘み上げられている。



番号	出土地点	登録番号	種類	残存	法量cm（　）は復元値					写真図版
					口径	体径	底径	器高	底径／口径	
1	2 層	D－20	土師器坏	3/4	14.3	－	4.9	4.3	0.34	7-7
2	1 層	D－19	土師器坏	3/5	13.9	－	5.4	4.2	0.39	7-6
3	2 層	D－18	土師器高台付坏	1/1	15.0	高合径7.0		6.1	－	7-8
4	2 層	D－21	土師器甕	1/3	(21.2)	(25.9)	－	－	－	8-5
5	1 層	E－5	須恵器坏	1/3	(15.8)	－	7.3	4.6	0.46	8-1
6	2 層	E－7	須恵器壺	4/5	(13.6)	10.0	21.3	19.1	－	8-6

第16図　1号土壙出土遺物

外面調整はロクロナデの後、体部下半にヘラケズリが施されている。内面調整は不明瞭であるが、ロクロナデが施されている。

須恵器

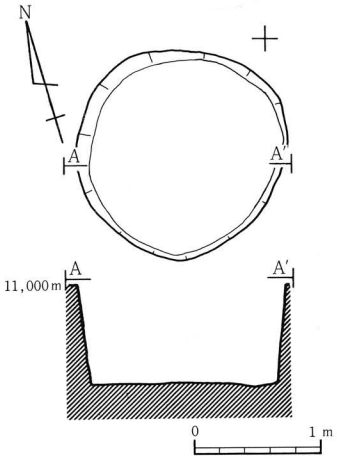
坏（第16図５）：体部から口縁部まで丸味をもって外傾する器形である。底部の切り離しは回転糸切りで、無調整である。

壺（第16図６）：最大径を体部上半に持ち、器高より体径の大きいものである。ほぼ直立する短い頸部に、外反する口縁部が付く。口縁端部は肥厚する。外面調整はロクロナデの後、体部下半にヘラケズリ、底部はナデが施されている。内面調整はロクロナデの後、底部にナデツケが施されている。

〔２号土壙出土遺物〕

瓦は全て本葺瓦で、燻し瓦である。丸瓦・平瓦・道具瓦（熨斗瓦）が見られる。

瓦（第18図）：丸瓦・平瓦とも全て破片資料で、計測できるものはない。熨斗瓦は比較的残存が良く長さ約28cm、最大幅約14cmのものが３点みられた。また熨斗瓦には刻印があるものが２点（２・３）認められた。



第17図　２号土壙平・断面図

ピット

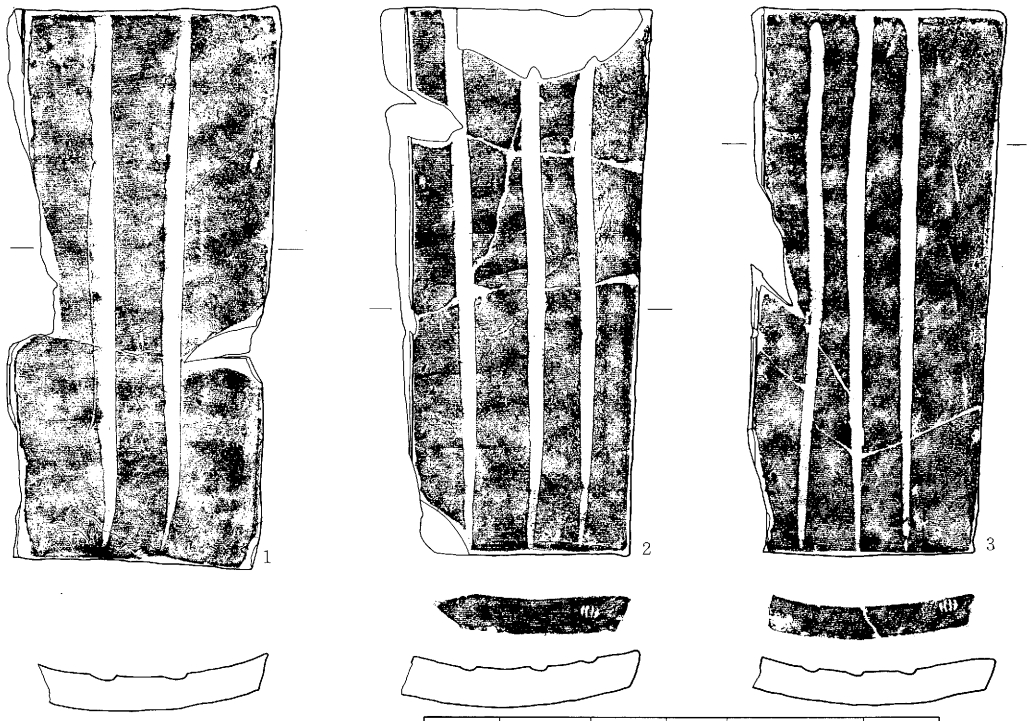
52個検出された。この内柱痕を持つものが数例あった。規模・配列・配置に規則性を見い出すことはできなかった。ピット内より遺物を出土したものはない。

河川跡

調査区北東側、Ａ～Ｃ－５～11グリッドで検出された。溝跡を切っている。南岸は検出されたが、北岸は調査区の外（北側）に位置する。南壁は直線的ではなく、「Ｌ」字状に曲っている。河川幅は不明であるが、調査区東側（10ライン）のカク乱部よりの断面観察では、深さは約２ｍである。堆積層は大別４層から成り、１層はシルト質粘土層、２層は幅50cmの砂礫層、３・４層は粘土層で、10cm幅の４層中には未分解の植物が含まれる。

６．その他の出土遺物

基本層位Ⅰ・Ⅱ層中より出土した遺物である。ほとんどが瓦片であるが、陶器片もわずかに１点出土した。

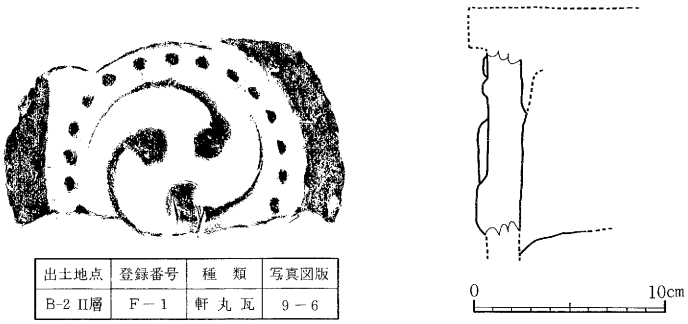


番　号	出土地点	登録番号	種　類	法　量cm	写真図版
1	堆積土下部	H－1	熨斗瓦	27.7×13.9×2.0	9－3
2	堆積土下部	H－2	熨斗瓦	28.9×14.2×2.1	9－4
3	堆積土下部	H－3	熨斗瓦	28.7×13.2×1.8	9－5

第18図　２号土坑出土遺物

瓦（第19図）：軒丸軒が１点出土している。燻し瓦である。瓦当面の資料で、瓦当面の径は約18cmである。周縁は中高縁で、瓦当文様は内区に左巻きの三ツ巴文が、外区には連珠がめぐる。

陶器（写真図版９－２）：１点出土した。志野焼の碗？である。体部下半の破片資料である。外面文様は不明で、内面には界線（いずれも鉄絵）がめぐっている。内外面の施釉は長石釉で、貫入が認められる。また、内面には目跡がみられる。慶長頃の作と考えられ、寛永頃には廃棄されたのではないかと思われる。



出土地点	登録番号	種　類	写真図版
B-2 II層	F－1	軒 丸 瓦	9－6

第19図　基本層位出土遺物

第Ⅳ章　遺構の所属年代とまとめ

1．遺構の所属年代

(1)　古　墳

今回の調査で最も古い遺構として位置づけられるもので、1基検出された。墳丘部及び周湟上部はすでに削平され、周湟底面付近がわずかに残存するのみである。周湟底面・堆積土より当古墳に伴ったと考えられる円筒埴輪の破片が比較的多く出土した。完全な形に復元できる資料は得られなかったが、内外面調整、タガ・スカシ孔の位置・形状の特徴は、同地域の裏町古墳[註1]、大野田古墳群[註2]出土の円筒埴輪に類例を求められる。これら古墳は伴出遺物の年代より、5世紀後半から6世紀初頭に位置づけられており、当古墳の所属年代もほぼ同時期のものと考えたい。

(2)　竪穴住居跡

4軒検出された。これら住居跡より出土した図化資料（土器）により、その所属年代の検討を加えたい。これら住居跡に伴う土器は床面、カマド内、貯蔵穴内出土のもので、2～4号住居跡から出土をみている。また、3号住居跡床面直上の2層（炭化物混在層）出土のものも、床面出土のものと大差がないものと考え同等のものとして取り扱った。

2～4号住居跡よりは土師器坏・甕・須恵器坏が出土している。しかし、各住居跡ごとに土器の組み合せが異っている（2号住…土師器坏・須恵器坏　3号住…土師器坏・甕、須恵器坏　4号住…土師器坏・甕)。ただし、土師器坏は各住居跡に共通しており、これを仲介すれば、共通しない他の土器も共伴関係として捕えられる。これら土器は全て製作に際してロクロを使用している。このような特徴をもつ土師器は、東北南部の土師器編年では「表杉ノ入式[註3]」に比定されており、共伴関係にある須恵器も同時期のものと考えられる。従って、2～4号住居跡の所属年代は平安時代に位置づけられる。

さらに、出土土器の細部にわたる検討を進めることとする。土師器坏、須恵器坏の器形、製作技法に関しては、口径に比べ底径が小さく、やや深い器形で（土師器坏―底口比平均0.40、口高比平均3.2、須恵器坏―底口比平均0.38、口高比平均3.1)、底部の切り離しは全て回転糸切りで、調整がされないものである。土器の組み合せに関しては、いずれの住居跡よりも赤焼土器の出土をみていないという特徴が上げられる。

これらの特徴を白鳥氏による多賀城内の土器編年[註4]に対比すると、土器の組み合せの点ではD群土器に、器形的特徴の点ではE群土器に位置づけられるものと思われる[註5]。次に、一般集落で土師器坏の底部が回転糸切り無調整のみで構成されている出土例は、安久東遺跡1～3号住居跡[註6]、清水遺跡27・50号住居跡、9号溝内1号土壙[註7]に求められる。両遺跡の土師器坏の器形的特

徴は、当遺跡のもの以上に底口比、口高比が少ない[註8]。また、土器の組み合せの点では赤焼土器坏を共伴している。両遺跡を白鳥氏の土器編年に対比すれば、土器の組み合せの上ではＥ群土器、土師器坏の器形的特徴の上ではＦ群土器に位置づけられるものと思われる。Ｄ～Ｆ群土器は「官衙・城柵・寺院跡における土器群出土状況、窯跡での瓦との共伴関係および灰白色火山灰との層位関係」よりＤ群土器－９世紀後半頃、Ｅ群土器－10世紀前半頃、Ｆ群土器－10世紀中頃の年代が与えられている[註9]。安久東遺跡では２号住居跡出土の灰釉陶器の年代より、住居跡供出土器の年代を10世紀後半頃としており、清水遺跡出土土器もこれを拠りどころとし、同年代のものとしている[註10]。以上のように安久東遺跡、清水遺跡の資料はＥ群土器、Ｆ群土器のいずれに対比した場合にも、それぞれ時間差が認められる。

以上を踏まえた上、当住居跡の出土土器の上限はＤ群土器からＥ群土器にかけての年代が与えられよう。下限については多賀城内出土土器群（ＥorＦ群土器）と一般集落跡出土土器群（安久東遺跡１～３号住居他）の間に時間差が認められること、また、当遺跡に赤焼土器が共伴しないことより流動的である。従って、２～４号住居跡の所属年代は９世紀末頃から10世紀にかけての年代を想定したい。尚、１号住居跡は時期決定資料に貧しい遺構であったが、堆積土中より２～４号住居跡と同時期の土器片を出土している。また、住居跡の配置関係に於いても等間隔に並列するという親密性が認められることより、２～４号住居跡とほぼ同時期のものと考えたい。

(3) 溝跡・竪穴遺構

竪穴遺構は３基検出された。これら全ての堆積土上部には、10世紀前半に降下したと考えられる灰白色火山灰[註4]が小ブロック状、小レンズ状に含まれていた。従って、３基ともほぼ同時期のものと思われる。重複関係では溝跡と竪穴遺構（３号）はともに古墳の周湟を切っている。また、竪穴遺構（１・２号）は溝跡を切っている。出土遺物では溝跡、竪穴遺構堆積土中には、ともにロクロ使用の土師器片を含んでいる。以上、竪穴遺構の堆積土、重複関係、出土遺物の点より、溝跡は平安時代に埋ったものと考えられる。ただし、竪穴遺構の所属年代が10世紀前半以前に位置づけられることより、溝跡は平安時代でも前半には埋っていたと想定される。両遺構とも住居跡群との時間的な関係については、出土遺物の点、重複関係がない点より、言及はできない。

(4) その他の遺構

１号土壙、２号土壙は出土遺物より所属年代は、平安時代、近世と考えられる。１号土壙は４号住居跡を切っているが、出土土器に大差が認められない点より、住居跡群とほぼ同時期かやや後続する時期のものと思われる。２号土壙は今回の調査で検出した遺構中、若林城関係の

遺構として認定された唯一のものである。

2．ま と め

1．若林城跡は広瀬川によって形成された標高12mの自然堤防上に立地している。

2．検出遺構には古墳時代中期後半～後期初頭頃の古墳1基（周湟のみ）、平安時代の竪穴住居跡4軒、溝跡1条（上限時期不明）、竪穴遺構3基、土壙1基、若林城に関係する土坑1基の他、時期不詳の土坑、ピット、河川跡がある。

3．出土遺物には弥生土器、土師器（ロクロ不使用、ロクロ使用）、須恵器、陶器、瓦、土製品、石製品、鉄製品があり、その多くは破片資料である。全体的に出土量は少ない。

4．若林城関係の資料は上記2号土壙の他、若干の陶器片、瓦片が出土したのみである。従って、今回の調査区内では、すでに若林城関係のものはその後の建造物等によって破壊され、消滅してしまったものと思われる。

註　　記

註1　伊藤信雄・伊藤玄三・岩渕康治「裏町古墳発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第7集　1974

註2　長島栄一「大野田古墳群」『年報3』仙台市文化財調査報告書第41集　1981

註3　氏家和典「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯　1957

註4　白鳥良一「多賀城出土土器の変遷」『研究紀要』Ⅶ　宮城県多賀城跡研究所　1980

註5　註4記載の図資料より抽出したD～F群土器の土師器坏、須恵器坏の内、底部の切り離しが回転糸切りで無調整のものに関する底口比、口高比の平均は以下のようになる。ただし、図資料からの数値のため、精度には欠ける。また、註8の安久東遺跡（註6図資料より抽出）、清水遺跡（註7図資料より抽出）の数値も同様である（安久東遺跡底口比に関しては報文資料）

D群土器　土師器坏―底口比0.42　口高比3.3　須恵器坏―底口比0.45　口高比3.5

E群土器　土師器坏―底口比0.40　口高比3.0　須恵器坏―底口比0.44　口高比3.3

F群土器　土師器坏―底口比0.36　口高比2.8　須恵器坏―図示資料なし

註6　土岐山武　「安久東遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅳ』宮城県文化財調査報告書第72集　1980

註7　丹羽茂・小野寺祥一郎・阿部博志「清水遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅴ』宮城県文化財調査報告書第77集　1981

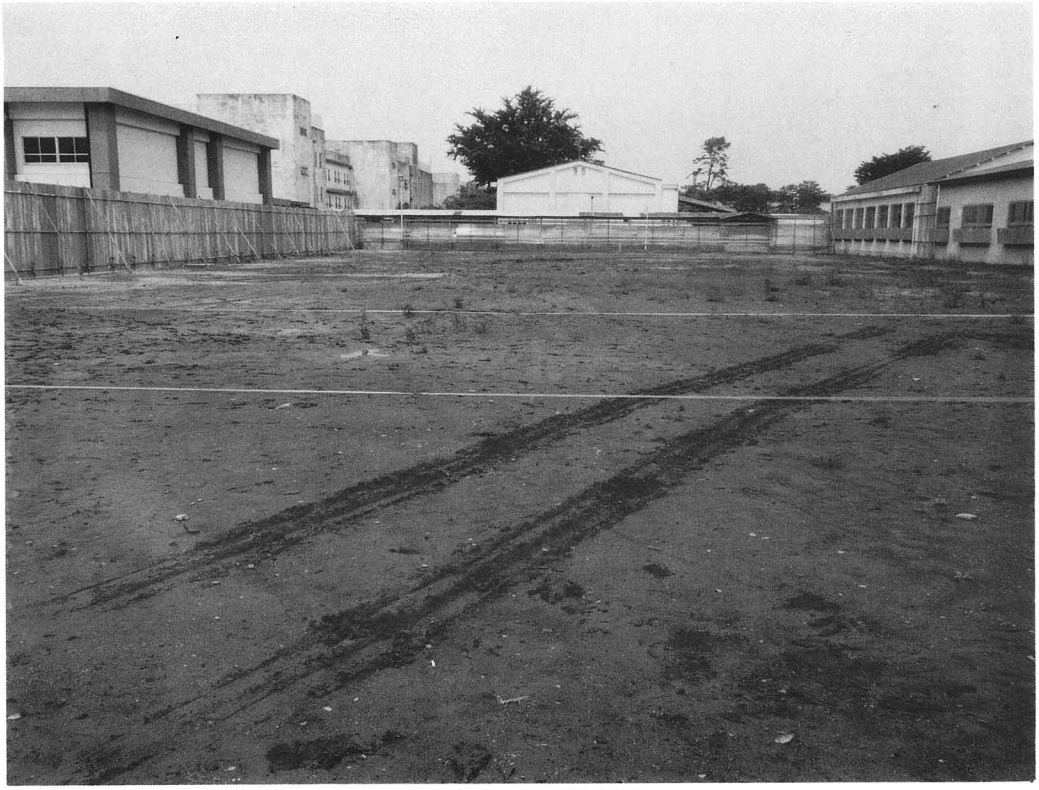
註8　安久東遺跡　土師器坏―底口比0.37　口高比2.9

清水遺跡　　土師器坏―底口比0.36　口高比3.0

註9　白鳥良一　「第Ⅶ章　2 (2) 土器」『多賀城跡政庁跡』本文編　宮城県多賀城跡研究所　1982

註10　安久東遺跡報文中（註6）では、この灰釉陶器の年代を11世紀頃としたが、その後の鹿島遺跡・竹之内遺跡の報文中（佐々木和博「鹿島遺跡・竹之内遺跡」宮城県文化財調査報告書第101集 1984）で10世紀後半頃に訂正している。したがって、清水遺跡出土土器の年代も今後同様に変更されるものと考える。

1．若林城跡遠景



2．調査前風景（東より）

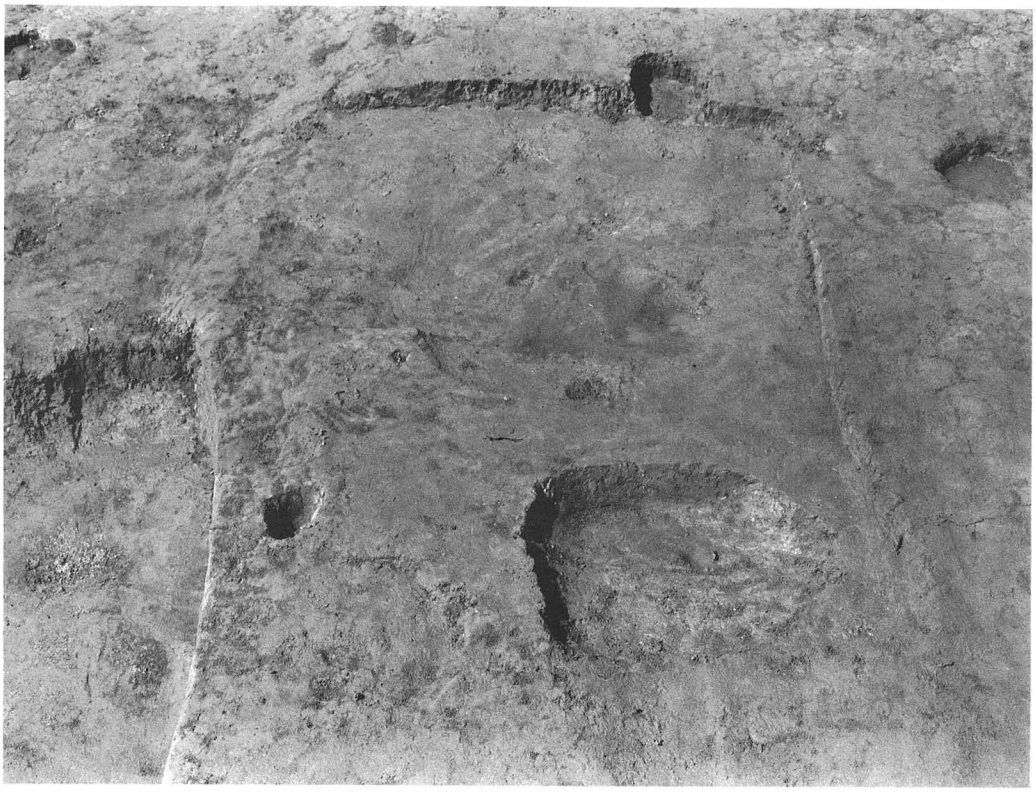
図版１　遺跡全景

１．古墳周湟完掘状況（Ａライン　南より）

２．古墳周湟完掘状況（Ｄ・Ｅライン　南より）

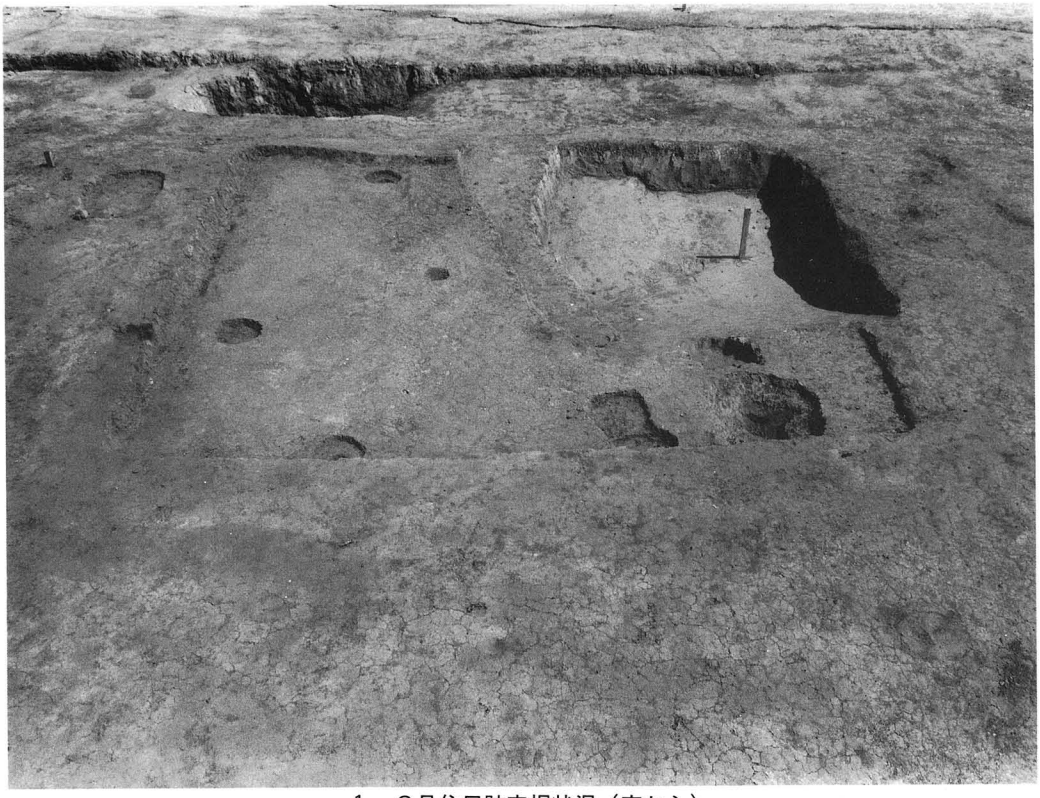
図版２　検出遺構１（古墳周湟）

１．古墳周湟内円筒埴輪出土状況



２．１号住居跡完掘状況（南から）

図版３　検出遺構２（古墳周湟、１号住居跡）



１．２号住居跡完掘状況（南から）

２．３号住居跡完掘状況（南から）

図版４　検出遺構３（２・３号住居跡）

１．４号住居跡カマド完掘状況（南から）

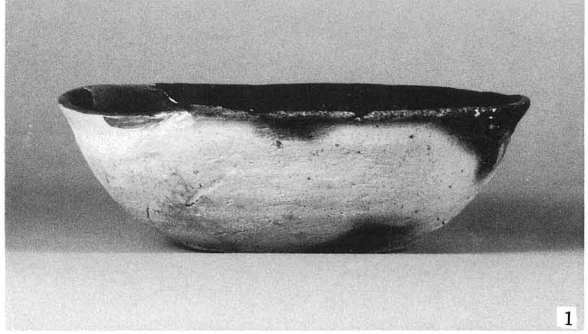
２．１号竪穴遺構完掘状況（南から）

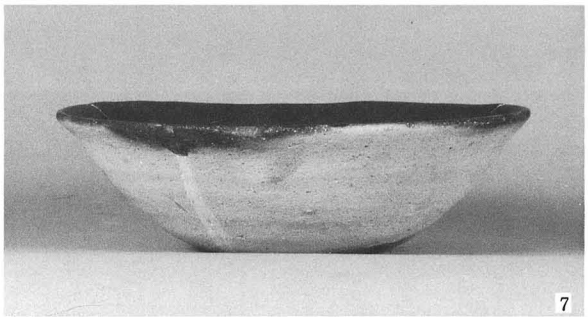
図版５　検出遺構４（４号住居跡、１号竪穴遺構）

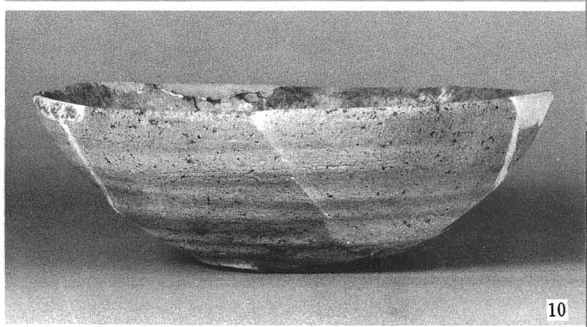
１．１号土坑遺物出土状況（南から）

２．２号土坑完掘状況（東から）

図版６　検出遺構５（１・２号土坑）



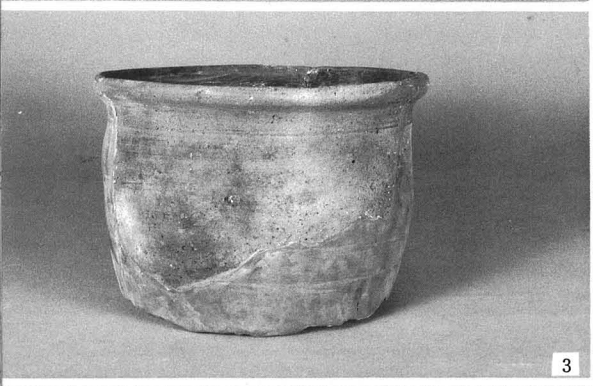


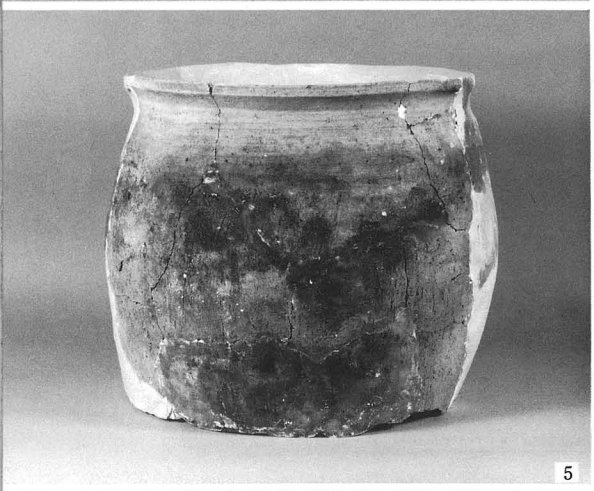


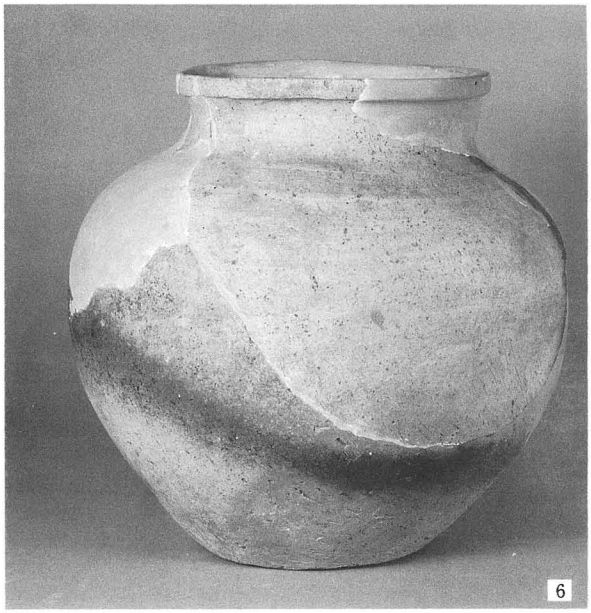
土師器：１～８　　須恵器：９～11

１．第７図１　　２．第７図２
３．第９図１　　４．第11図２
５．第11図１　　６．第16図２
７．第16図１　　８．第16図３
９．第７図３　　10．第９図３
　　11．第11図４

図版７　　出土遺物１







土師器：2～5　須恵器：1・6　埴輪：7

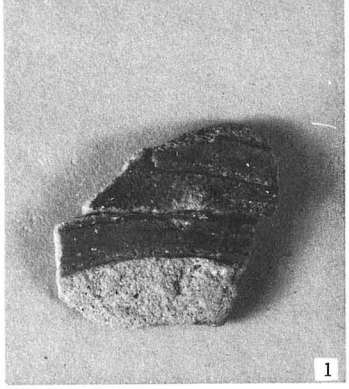
1．第16図5　　2．第9図4

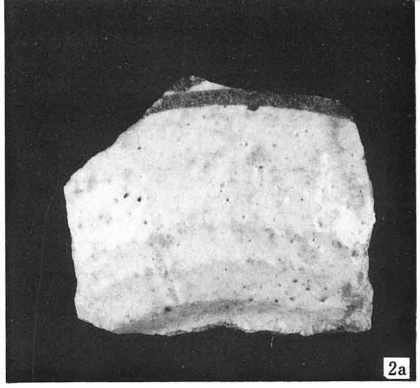
3．第12図3　　4．第12図1

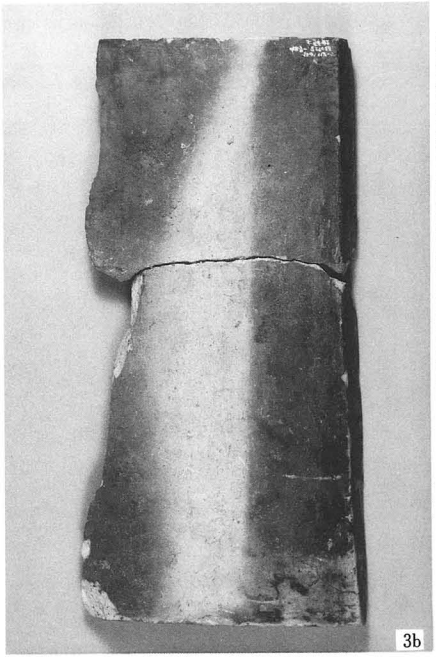
5．第16図4　　6．第16図6

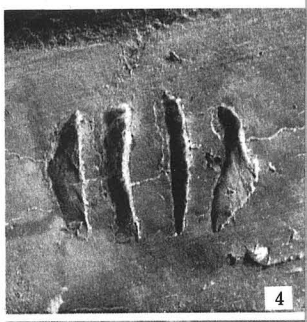
7．第5図

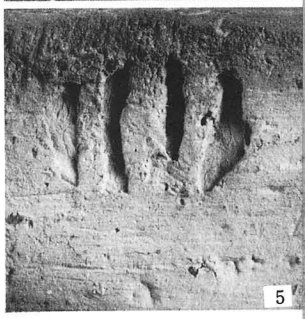
図版8　　出土遺物2

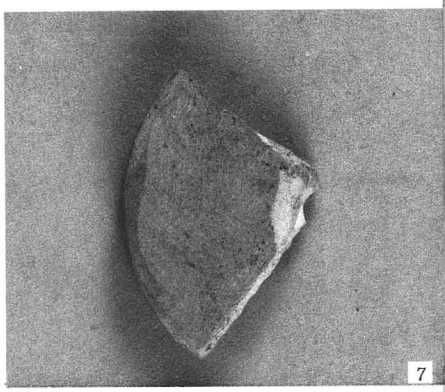


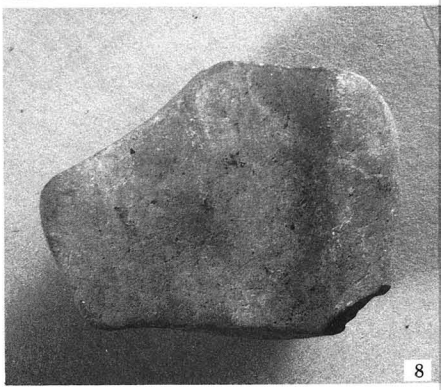












弥生土器：1　陶器：2　瓦：3～6（4・5は刻印）　石製品：7・8

3．第18図1　　4．第18図2

5．第18図3　　6．第19図

7．第9図7　　8．第12町7

図版9　　出土遺物3

職　員　録

社会教育課

課　長　阿部　達
主　幹　早坂春一

文化財管理係

係　長　佐藤政美
主　事　岩沢克輔
〃　山口　宏

文化財調査係

係　長　佐藤　隆
主　事　結城　慎一
教　諭　菅原　和夫
主　事　木村　浩二
〃　篠原　信彦
教　諭　小野寺和幸
〃　佐藤美智雄
主　事　佐藤　洋
〃　金森　安孝
〃　佐藤　甲二
〃　吉岡　恭平
主　事　工藤哲司
〃　渡部弘美
教　諭　渡辺　誠
主　事　主浜光朗
〃　斎野裕彦
〃　長島榮一
〃　及川　格
教　諭　千葉　仁
〃　松本清一
主　事　高橋　泰
〃　鈴木善弘
派遣職員　高橋勝也

（昭和61年３月現在）

仙台市文化財調査報告書第90集
若　林　城　跡
―平安時代の集落跡―
昭和61年３月
発行　仙台市教育委員会
仙台市上杉１－５－１
仙台市教育委員会社会教育課
ＴＥＬ(代)61―1111
印刷　㈱東北プリント
仙台市立町24―24　ＴＥＬ63―1166